
天使と癒しの羽

白銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と癒しの羽

【NZコード】

N3846X

【作者名】

白銀

【あらすじ】

セツエイはいつも通りに高校から帰宅をした。だが、なぜか鍵は閉まつておらず、家の中には見知らぬ少女がいた。
その少女は自らを妹と名乗り居座る事に。
兄セツエイと妹天使フィリアの心を癒す物語。

「のべふろ」に投稿済みです。

天使と癒しの羽 プロローグ

天使と癒しの羽

プロローグ

授業の終わりを知らせる鐘が鳴り響く。クラスメイトがそれぞれに凝り固まつた体を解していく。

「…………」

窓側の席に座っているセツエイ・ギベルティは無言で黒いバッグの中に教科書を詰め込んでいく。女子生徒ですら羨ましがるサラサラの黒髪に端正な顔立ち。身長は180センチと高く、手足はすらりと細い。

「相変わらずクールだな、王子様は」

後ろの席に座る少年が声をかける。

真っ赤に染めた髪が目印で身長もセツエイに並ぶくらいに高い。セツエイの数少ない友人の一人でマクシミリアン・スレイブという。セツエイも含めて皆はマックスと呼んでいる。

「その名で呼ぶな」

セツエイは短く言い立ち上がる。王子様など、とてもではないが似合わないと思う。

「とと……待ってくれよ、セツエイ」

マックスも慌てて立ち上がる。

「セツエイ、バスケ部の応援を頼むよ」

別のクラスメイトがセツエイの進路を塞ぐ。

「すまないが……一人暮らしは大変なんだ」

セツエイは無表情でつぶやきクラスメイトの横を通り過ぎる。視線を合わそうともしないセツエイの態度を見ればこれ以上誘う気にはなれなかつた。

「そうか……」

クラスメイトが肩を落とす。セツエイは振り向きもせずに教室を後にした。

高校を出てセツエイは空を見上げる。空に見えるのは黒い天井。セツエイ達が暮らすのはドーム型都市だ。管理ナンバーは6。単純に6番目に出来たからだ。この世界は寒冷化が進みドーム型都市の中でしか生きられない。外に出れば備えがなければ数時間で凍死してしまうだろう。

数世紀前までは、愚かしいほどに資源を使い温暖化と騒いでいた。無作為に資源を使用しなければ温暖化どころか寒冷化が進んでいるといのに。数多くの科学者が叫んだが誰も聞かなかつた。実際に肌で感じる温度上昇の方が信じやすかつたのだろう。その代償がこのドーム型都市での生活。

「セツエイ君、また考え方か？」

マックスがわざとらしく思考を続けるセツエイに言葉をかける。

「ああ。過去の人類の愚かさについて思考をしていた」

「高校生が考える事かよ。まあ、寒冷化が進んでいるのに温暖化対策をしてたのは信じられないけどな」

マックスが頭を搔いた。これがドーム型都市に住む人間の共通認識。

「だがこの冷え切つた世界でドーム型都市を……そして、その中でエネルギーが循環するシステムを構築したのは敬意に値する」

セツエイが顎に手を置いて言葉をつぶやいた。

「……60億いた人口が10億まで減ったんだからな。50億人の人間の命が作つた都市か。寒気がするね」

マックスが肩を落とした。教科書の中でしか知らないが、建設途中に凍死した人間は数十億単位らしい。

「ああ」

短くつぶやいて視線を前にした時に十字路が見えた。ここで二人は別れる。

「もうここか。また明日な」

マックスが十字路を右に曲がる。セツエイは軽く片手を上げて真っ直ぐに進む。

「まあここでしか生きられないんだ。平凡に生きるしかあるまい」
セツエイは独語して一人暮らしをしているアパートを目指す。
ほどなく歩くと鉄筋とコンクリートで作られた5階立てのアパート
が見えた。アパートの2階にある205号室がセツエイの部屋だ。
セツエイはアパート右側に備え付けられた階段を上り自室を目指す。
制服のポケットから鍵を取り出して差し込むとした時に違和感が
した。

「空いている？ 馬鹿な」

セツエイは鍵が閉まつていらないドアを不審な目で見た。確かに朝は
鍵を閉めた。可能性があるとすれば泥棒か。だが学生が一人で暮ら
している場所だ。狙うには不自然極まりない。狙わずに適当に入っ
たのなら話は別だが。

「まだ……いるとは考えにくいか」

セツエイは警戒しながらドアを開ける。アパートは台所の他には
トイレと浴室、残りは一部屋しかない。玄関で靴を脱いで台所を見
渡す。だが誰もいない。そのまま進み視線を部屋に向ける。中央の
丸テーブルに白い何かがいる。

「くつ……」

警戒して身構える。

だがよく見るとその何かはテーブルにもたれて眠る少女だと気づいた。セツエイに負けると劣らないサラサラの淡い金髪を腰まで伸ばし、真っ白な法衣に身を包んだ少女。だが一番目を引くのは少女の背に生えた白い羽。その羽を見て想像できるのは天使だった。だが、なぜか少女は右側にしか羽がない片翼だった。セツエイの頭の中に
ある天使は両翼である。

「……飾りか？」

セツエイは警戒しながら近づく。少女は起きる気配がない。ゆつ

くりとセツエイは手を伸ばして羽に触れた。柔らかい羽だった。確かに生命を感じる。

「うーくすぐつたい」

少女が呻く。どうやら本物らしい。

「…………」

セツエイは悩んだ。このまま先手必勝で倒し警察に突き出すか、一応話だけでも聞くのか。

「よく寝たーー！」

悩んでいる内に少女が腕を伸ばす。どうやら起きてしまったらしい。ならば後者を選ぶしかあるまい。

「おい……お前は何者だ」

セツエイは低い声でつぶやく。最初が肝心だ。相手のペースで話をするつもりはない。

「ふえ？ 僕？ 妹だよ」

少女がセツエイに微笑む。無邪気な笑みだった。大きな緑色の瞳がセツエイを見つめる。

「は？ 妹？」

セツエイは理解不能な状況に突き落とされた。思考が急停止する感覚。

「うん。妹だよ。片翼しかないから天界から追放されてしまったんだ。他に行く所もないから来たの。離れていても分かるからさ」

自称妹が説明。セツエイは額に手を置いた。焦る自分がいる。これは完全に相手のペースだ。いや、ついていけていない。戦術の基本は各個撃破。一つずつ潰していく。

「俺に妹はない」

断言した。これは事実だ。おぼろげな記憶を辿ると、セツエイが5歳くらいの時には父親がいたがそれ以降は家族との関わりはない。妹がいるなど聞いた事もない。

チラリと自称妹に視線を向けると、大きな緑色の瞳に涙を溜めていた。

「うう……せつかく会えたのに」

自称妹が顔を覆つて泣き始める。まさかこんな反応をするとは思つてもいなかつた。

「お……おい。泣くな……」

セツエイは慌てて言葉をかける。女性に泣かれた事はない。どうしていいのかさえ分からない。

「信じてくれる？」

自称妹が上目遣いで見つめる。潤んだ瞳がか弱さを伝え、一いちらが悪い事をしたような錯覚に陥る。強烈な罪悪感が心を引き裂く。

「だ……駄目だ。流されるな……妹だと言うなら証拠を見せろ!」

セツエイは拳を握り、立ち上がる。自称妹はゆっくりとセツエイの左側を指差した。

「なんだ？」

セツエイは首を傾げてゆっくりと自らの左側を見た。突如、変化が訪れる。背中から何かが生えてくる感触。服を突き破ったのは白い羽。片翼の翼。

「僕とセツエイは羽を一人で分けたんだ。その羽は僕の羽でもあるし、セツエイの羽もある」

自称妹が説明。

「……非現実的だ……か……科学的に説明しろ」

セツエイは力を失つて膝をついた。ショックがでかすぎる。どうやら俺は人間ではないらしい。科学的に説明しろと言つた所で実際に生えているのだ。もう信じるしかない。

「目に見えた事を信じるしかないよ。それにその羽は僕が貢うよ」
自称妹がゆっくりと近づいて羽に触れた。羽は光の粒子となつて舞う。自称妹を包んで吸い込まれるように体内に入つていった。俺の羽は綺麗さっぱり消えた。

「ふふ……これで俺は人間だな」

セツエイは安堵の息をついた。先ほどの物は幻だと思えばいい。

そうして人間は己を誤魔化しながら生きていくものだ。

「そうだね。ここに生きるのに天使の力はいらないよ」

自称妹が笑う。

「お前はこれからどうするんだ?」

セツエイはここに来た目的は何となく分かったが、これからどうするのか気になつた。どうやら身寄りがないらしいので。最悪はケースが頭に浮かぶ。

「えっと……羽は貰つたけどまだ馴染まないんだ。新しく生えるまで待たないといけない。それに簡単には生えないんだよ。人の心を癒して天使の使命を果たした時に羽が成長するんだ」

自称妹が説明。俺が聞きたいのはその間にどうするかだ。

「…………」

無言で言葉を待つ。

「その間は……ここに置いて。お願ひ……お兄ちゃん!」

自称妹が手を合わせてお願いする。普段なら即効で却下するべき事態。だが最後のお兄ちゃんという言葉がどうも引っかかる。妹を見捨てる兄がこの世界にいるだろうか。全く身に覚えはないのだが。「少し考えさせり……今日はここに居てもいい」

セツエイは結局そんな事を言つていた。内心では呆れながらも見捨てる事はできなかつた。

「わーい。さっすがだね」

自称妹が満面の笑みでセツエイに飛びついてきた。慌てて抱き止める。

「まだ置くと決めてない!」

セツエイは慌てて抱擁から逃れようとする。女性から抱擁された事など今までにない。心臓が早鐘のように鳴り収まらない。

「ありがとう」

自称妹は嬉しそうにセツエイに頬擦りをした。何とも言えない柔らかさがセツエイを襲う。例え妹であつても遠慮してほしい。

「いいから離れる。妹がこんな事をするか!」

「うん? しないの? 妹の愛情表現だよ?」

叫ぶセツエイに対して、自称妹は小首を傾げた。セツエイは溜息をつくしかない。

「ところで名前は？ フルネームで」
ここまでやり取りをしたが名前を聞いていない。一緒に生活するなら名前を知りたい。

「フィリア・ギベルティだよ」

フィリアと名乗った自称妹が微笑む。ギベルティという言葉を聞いてセツエイはそろそろ諦めないとけないと思つた。本当にこの天使は妹かもしれない。

「よろしくな…… フィリア」

フィリアの頭を撫でながらつぶやいた。

「うん！」

フィリアは元気よく頷いた。

*

セツエイは本日の授業の復習をするために丸テーブルの上に教科書を置く。チラリと視線を左に向けるとフィリアはテレビを凝視していた。

「ほえーーー

感嘆の声を上げてテレビを凝視している。内容がアニメなのがかなり気になる。何やらステッキを持った魔法少女が、何かの呪文を唱えて怪物を撃破している。

「…………

セツエイは教科書を見つめる。左側から魔法少女の拙さを感じさせる声が聞こえる。どうも落ち着かない。今まで一人暮らしのために無音で勉強していたからだろうか。

「これが人間を怠惰な生活に引きずり込むテレビ…… 確かにこのクオリティは見入ってしまうね」

フィリアは両手の拳を握つてうんうんと頷いていた。どうやら天界

にテレビはないらしい。昼間からテレビを見て「ロロロロ」している天使など想像したくないので、それは構わないのだが。

「それだけではない」

セツエイはリモコンを操作。ニユース番組に変更。

「……それでは次のニユースです。我らがドーム型都市6は、同じドーム型都市8と一緒に週間に接近します。一時的に物資及び情報の交換を行い……」

ニユースキャスターが説明をしていく。

「ドーム型都市の物資及び情報の交換……確かに6は8の後に10とも一週間に後に接触するんだったね。その事は伝えないのはどうして？」

フイリアが顎に手を置いて思考。他の都市とも接触するなんて初耳だ。

「それは本当か？」

セツエイが気になつて質問をする。

「うん。天界に入ればリアルタイムで情報が入るから」

フイリアが頷いた。

恐るべき天界の住民。どうやらある程度は好きにやらせてもらつているが、管理はされているらしい。この程度のニユースなど内容の確認程度にしかならないだろ？

「そろそろ晩御飯だね。作るよーー」

フイリアはテレビをそのままにして台所に向かう。

「作れるのか？」

セツエイがテレビを消しながら疑問の声を上げる。

「大丈夫だよ」

フイリアが振り向いて笑顔を向けた。そこまで言つのなら任せて見ようと思つた。

勉強に集中する事30分。美味しい匂いがして顔を上げる。冷蔵庫の中に物をあまり入れないので作れる物は限られている。現在は日持ちするカレーやら、シチューやらを作る材料しか置いてい

ない。

法衣の上からセツエイが使っているエプロンを身につけたフイリアは何かをかき混ぜている。エプロンはサイズが合わないのかあまり役目を果たしていないような気もする。

さて、カレーか、クリーミッシュチューか。気になつて立ち上がる。

「ビーフシチューだよ」

フイリアが振り向いて微笑む。どうやら言つだけあつて料理はできるらしい。最初は面倒事が増えるかと思つたが料理をしてくれるだけでもありがたい。それだけ自由な時間が増えるのだから。

「持つていくな」

フイリアが天使の笑みを浮かべて小皿にシチューを盛つた。後は炊いてあつたご飯を持つてきて終わり。質素ではあるが一人暮らしの身にはこれくらいが妥当な所だ。

教科書を退けた丸テーブルに料理が並べられる。一人で食べる夕食など何年ぶりだろうか。この部屋にはあまり人を呼ばない。人々、呼ぶような友人もいない。

二人で食事を囲める。それは些細な事かもしない。でも、そんな些細な事でもセツエイには嬉しかった。自然と頬が緩んでしまつた。

「何かいい事あつた?」

フイリアが笑顔を向けてセツエイの顔を覗き込む。その笑顔がセツエイの心を温めていく。心を癒す天使の笑顔。フイリアが本当に天使なのだと思えた。

「あつたよ」

セツエイは微笑んだ。

家族がおらずずつと一人で寂しく暮らしていたセツエイ。それでも平氣だつた。一人で何でも出来ると思っていた。実際に何とかしてききた。料理、洗濯、掃除など家事は当然こなし、空いた時間には勉強をする。皆が遊んでいる間に物事を効率よくこなす自分が誇らしくもあつた。

だが違った。セツエイは忙しい現実に身を置いて誤魔化していたのだ。一人でいる事の寂しさから。でも、今は自分に笑顔を向けてくれる人がいる。それが素直に嬉しかった。

「僕にやつと笑いかけてくれたね。嬉しいよ」

フィリアは満面の笑みで返した。セツエイが笑う事を素直に喜んでくれるフィリア。妹なのかと疑っていた自分が愚かしく思えた。理屈などなく、ただ一緒にいる人が笑つていれば嬉しい。それが家族というものだ。失つていた感情。封印していた想い。それらを思い出させてくれる少女。

「お前は俺の妹だよ」

セツエイがフィリアを撫でる。

「うん」

フィリアは一つ頷いた。頷いた瞬間にフィリアの背が輝く。

「な……なんだ？」

セツエイは慌てて立ち上がる。閃光。瞳を開ける事も敵わない光。

「……僕にとつては一番最初がセツエイだったのは嬉しいかな」

フィリアが微笑む。光が收まり、セツエイは恐る恐るフィリアを見つめた。フィリアの左に小さな一枚の羽がある。右に生えている羽とは大きさも量も違うが確かに存在した。

「これは……？」

セツエイが小さな羽を指差す。

「セツエイの心を癒したから生えたの」

フィリアが小さな羽を撫でる。触れれば抜けてしまいそうな儂い羽。でも、確かにそこにあつた。

「そうか……ありがどう。フィリア」

セツエイが家族に向ける温かい笑顔を向ける。

「僕は何もしてないよ。でも……役に立てたのならよかつた」

フィリアが誇らしげに羽を見つめた。

「そういえば……その羽はどうするんだ？」

セツエイは気になつて聞いてみた。そのまま外を歩けば間違いな

く目立つ。

「天界の住民が監視のために降りてくる場合もあるんだ。その時は……」

「こうやって」

フィリアが瞳を閉じる。閃光。セツエイは瞳を一度閉じて開く。そこには羽を失ったフィリアがいた。

「便利なんだな」

「でしょう」

まさかこんなにあっさりと消せるとは。フィリアは誇らしげに胸を張っていた。

「これなら確かに紛れても分からないな」

セツエイは安堵して再度箸を取つた。

「冷めたらいけないね」

フィリアも箸を取る。だが、一人が食事を再開して数分経つた時に呼び出し音が鳴つた。セツエイがドアに不審な視線を向ける。こんな時間に誰かが訪れる事はない。

「はーい」

フィリアが元気のいい声を出してドアに向かつ。

「おい。危ないだろう」

セツエイが慌ててフィリアを追いかける。だが追いつかずにフィリアはドアを開けた。ドアの向こうに立つていたのはスース姿の女性。

「あなたが天使ね」

すらりとした体躯に細い眼鏡が印象的な女性だった。セツエイはこの女性を知っていた。セツエイが通う高校の教師の一人だ。

「はい、天使です」

フィリアが右手を上げた。確認する方も異常だが、天使だと名乗るのもまた異常な光景だった。

「見た所……墮天使ではないよつね。どうしたの？」

スース姿の教師はセツエイをまるで視界に入れずに質問。

「僕は片翼の天使だから……追い出されたの」

フィリアが肩を落とした。

「相変わらずね。片翼の何がいけないのかしら。我らを正義と信じて、異形を認めない天界。さっさと滅べばいいわ」

スース姿の女性が呆れながらつぶやく。

「そんな事……ない！」

フィリアが拳を握つて叫ぶ。

「あらあら捨てられたのにまだ味方をするの？ 根っからの天使ね。さすがは慈愛の天使とまで呼ばれた天使の娘ね」

スース姿の女性が微笑んでフィリアを見つめる。どこか懐かしそうな、哀愁漂う笑みを浮かべていた。

「あなたは何者ですか？」

セツエイが言葉をかける。スース姿の女性が視線を向ける。

「私はあなたが通う高校の教師よ。あなたは最高学年ね。面識はないのは仕方ないわね。アンジュと言つわ。教師の名前くらいは覚えなさい、セツエイ・ギベルティ」

アンジュと名乗った教師がこちらに名乗った。だが聞きたい内容ではない。

「天使……なのですか？」

セツエイは問うた。

「そうよ。ただ墮天使よ。この世界に身を置いて、この世界を肌で感じるのが役目。そして、降りて来た天使の面倒を見るのが仕事よ。とある天使を庇つたおかげで罪が消えるまではここで生活するのよ」

アンジュがつぶやいて一度瞳を閉じる。刹那、赤い閃光が視界を埋めた。

「赤い翼？」

セツエイはつぶやいた。真紅の翼を持つた天使がそこにいた。

「これが墮天使……」

フィリアがアンジュを見つめる。舞い降りた真紅の羽を一枚手に

掴んでまじまじと見つめる。

「ここには何の用ですか？」

セツエイが問う。

「そう警戒しないで」

アンジュが微笑む。もう一度、赤い閃光がした瞬間に両翼が消えた。セツエイは言葉を待つ。

「ただ高校に入らないかと誘いに来ただけよ」

アンジュがフイリアに微笑む。

「高校？ セツエイが通っている？ 僕も入れるの？」

フイリアが瞳を輝かせる。

「ええ。そこでいろいろな生徒と関わって心を癒してあげて。そうすれば帰れるわ、天界に」

アンジュが空を指差した。だが空は見えない。行く手を塞ぐように見えるのはドームの天井。

「……なら通うよ。僕は戻る。そして伝える。この世界の事を。伝え聞いた事ではなくて、僕が見て感じた事を……僕の言葉で」

フイリアが空を見上げた。

「なら……俺も手伝うよ」

セツエイがフイリアの頭を撫でながらつぶやく。

「……これで貸しは無いわよ……慈愛の天使。私は私の目的のためにこの子を天界に帰すわ」

アンジュはフイリアをずっと見つめていた。

天使と癒しの羽 プロローグ（後書き）

感想ありましたらお願い致します。

天使と癒しの羽

1

セツエイは未知の温もりを感じていた。柔らかく、そして温かい何か。叶うならずつと触れていた何かがあつた。セツエイはそれを離さないように抱きしめる。

「温かい」

セツエイの耳元で眠そうな声が囁く。その瞬間にセツエイは覚醒した。目の前にはフイリアがいた。そして、自分はフイリアを抱きしめていた。

「ど……どうしてここに…」

セツエイは叫ばずにはいられなかつた。確か寝る前は今まで使っていた布団をフイリアに譲つたはず。そして、自らは毛布一枚に包まって寝ていたと記憶しているのだが。

「うー。セツエイ、叫ばないでー」

フイリアが顔をしかめる。だが、起きる事はなくフイリアはセツエイを抱き枕にして眠り始める。セツエイはまずは状況を把握しようと思った。どうやらフイリアは温かい布団を放棄して、わざわざこちらの毛布に入ってきたらしい。人間二人がくつつけば確かに温かい。だがこれでは布団を譲つた意味がない。

「……まあいいか」

セツエイはフイリアの寝顔を見てつぶやく。こんなに幸せそうな顔をして眠っているのだ。邪魔をしてはいけないと思つた。

セツエイはゆっくりとフイリアの抱擁から脱出。それからフイリアを抱き上げて移動。再度、布団に入れると

「もう朝？」

フィリアが眠そうなトロンとした瞳で見つめてくる。

「まだ早い。6時だからな。一時間は大丈夫だ」

セツエイが時刻を伝える。

「ご飯を作らないと。セツエイ、寝てていいよ
フィリアが微笑んでから起き上がる。晩だけではなく、朝も作ってくれるらしい。

「いいのか？」

セツエイは問う。

「うん。任せてよ」

フィリアは元気よく胸の前で拳を握る。セツエイは晩に引き続き、朝も任せることにした。

これだけゆっくりした朝は久しぶりだった。朝食を作り、準備をしていればすぐに出発時間である7時だった。だが今はホットコーヒーを啜りながら、朝のニュースをチェックする時間も十分取れた。すでに制服に着替えを済ませ、後は朝食を食べるだけだ。

視線を上げると鼻歌を歌いながら朝食を作っているフィリア。その背中を優しく見つめている自分がいる。

そんなゆつくりとした朝を過ごしていた時にチャイムが鳴った。

最近は客が多い気がする。

「俺が出る」

朝食を作っているフィリアに言葉をかけてドアを開ける。ドアを開けた先にいたのはアンジュだった。昨日と同じスース姿。

「迎えに来たわ」

アンジュが手短に用件を述べる。

「まだ時間ありますよ？」

セツエイが腕時計を見る。6時15分だ。授業の開始が8時。時間がありすぎる。

「手続きとかいろいろあるのよ。といつても教師が朝食を食べていない生徒を強制連行……というのはいけないわね。20分待つわ
アンジュは短く言ってドアを閉める。

「せっかちだな」

セツエイが溜息をついてドアを見つめた。

「出来たよー」

声に反応してフィリアを見る。すでにエプロンを脱いで、丸テーブルに料理を並べていた。四角い食パンの上に目玉焼きが置かれた

物、サラダ、晩に食べたビーフシチューの残りだ。

「……完璧だ……いい奥さんになれるぞ、フィリア」

セツエイが並べられた料理を見て満足気に頷いた。

「……なかなか上手だね、セツエイ」

なぜか頬を赤らめるフィリア。

「何か変な事でも言つたか?」

セツエイは首を傾げて丸テーブルの付近に腰を降ろす。

「ううん。早く食べよう」

フィリアは元気な笑顔を浮かべてパンに齧りつく。セツエイも笑顔を浮かべて同じようにパンに齧りついた。

外に出るとアンジュが背を壁側につけ退屈そうにドームの天井を見ていた。セツエイも天井を見上げる。特に何かがある訳でもないのだが。

「お待たせしました」

セツエイが言葉をかける。アンジュは視線をこちらに向けた。

「さつさと行くわよ」

アンジュは背を壁から放してこちらを見ずに歩いていく。

「行こう」

フィリアが嬉しそうに手を上げた。セツエイはここで立っている訳にはいかず、アンジュの後を追つた。

*

アパートの駐車場に止められていたのは2列シートの4人乗りの

車だった。アンジュが個人を特定する認証カードを車のドアに通す。音がした瞬間にドアロックが解除。三人が車に乗り込む。フィリアは始めてなのかシートに座つた瞬間に物珍しそうに辺りを見渡していた。

ドーム型都市では個人が車を所持する事はない。使用する場合は、各地に設置された保管場所に向かい個人の認証カードを通す。認証さればロックが解除され、自由に使用できる仕組みだ。個人で持たない理由はここがドームに囲まれた場所だからだ。遠出をするには狭すぎる。徒歩、または公共交通機関で済んでしまうのだ。

「行くわよ。一応シートベルトはつけてね」

アンジュが自らシートベルトをつけてから一人を見た。こういいう所は教師らしい。助手席に座つたセツエイがシートベルトをついた瞬間に、頬が引きつった。

聞こえてきたのはタイヤのスリップ音と、必要以上に吹かしたエンジン音。

「わー、速い」

フィリアが後ろで元気な声を出す。セツエイの表情は青ざめている。

「スピード……出しそぎ……ですよ！」

セツエイがスピードメーターを指差す。時速100キロを示すスピードメーター。見間違いでない。

「時間がないと言つたでしょう。教え方が下手な癖に、数分の遅刻でねちねちとうるさい凶師がたくさんいるのよ。担任になつたら本当に不幸よね」

表情を変えずにアンジュがアクセルを踏む。

一部の発音が明らかに違つた気がする。セツエイはあえて突つ込まなかつた。この教師はどうも表裏はなく思つた事は平氣で口にするらしい。

「少しは緩めて下さいよ！」

セツエイが叫ぶ。だがアンジュは無視して前だけを見ていた。

道はほぼ直進。このドーム型都市は建設の際に道に迷う事がないよう碁盤目状に道路を設けている。進んでいく道路はコンクリートで作られた無機質な道で、木や花などは数少ない。公園などは各所にあるが、湖の近く以外は人工物である。全てを失った人類が再生させた物。本当の自然に囲まれた土地を知らないセツエイは平氣であるが、湖の近く以外は人工物である。全てを失った人類が再生されるが、生命が宿つた生きた木々を見た事がある人にとっては不気味な都市かもしれない。

「セツエイ、あれが高校？」

フィリアが指差した先には高校が見えた。セツエイは見慣れた校舎を見つめる。

「ああ。あれだ」

セツエイが頷く。見慣れすぎて、それだけしか言葉がでなかつた。人口の木々が左右に等間隔に並んだ道を上がつた先。門を越えた先に見える建物。奇抜なデザインをしている訳ではない。鉄筋とコンクリートで作られたありふれた校舎がそこにあつた。

すでにちらほらと登校中の学生の姿がある。セツエイと同じ学ランを着た男子学生に、フィリアが来ているブレザータイプの学生服を着た女子生徒。フィリアは珍しそうに学生を車の窓から覗いていた。

「そろそろ到着ね」

アンジュが高校の門を潜り、校舎を左回りに迂回。校舎裏にある駐車スペースに車を停めた。フィリアは急いで車から降りて校舎を見上げる。

「……ようこそ。第三区高等学校へ」

アンジュがフィリアの背に言葉をかける。この辺りがドーム型都市の第三区だから第三区高等学校。シンプルではあるが全く親近感が沸いてこない。まあ、ドーム型都市になる前も地名が高校の名前になる事も多々あつたらしいので気にはしない。

「第三区高等学校……一緒に通えるね」

フィリアが振り向いてセツエイに笑いかける。ぼうっとその笑顔を見ていたらフィリアに手を取られた。

「行こう！」

フィリアに手を引かれて歩き出すセツエイ。目の前には無邪気な笑顔を浮かべ、歩いていくフィリア。その背中は楽しそと期待で溢れていた。自然とセツエイも期待で胸が膨らむ。

「悪くないな」

セツエイは自然とつぶやいていた。

今まで退屈で仕方なかつた。ただ将来のために通い、いい成績を取ることしか頭になかつた。だが、今は違う。フィリアの背中を見ていれば通い慣れた退屈な校舎も不思議と華やかに見える。

「どうしたの？」

フィリアがセツエイの言葉に反応して振り向く。セツエイはフィリアに笑顔を向けた。

「なんでもないよ、行こう」

セツエイはフィリアの小さな手を握り返す。

「うん！」

フィリアは元気よく頷いて校舎に入つていった。残されたのはここまで運転してきたアンジュ。

「私をスルーして行くなんて…… やるわね、あの子達」

アンジュが溜息をついて後を小走りに追いかけた。

*

手続きを済ませて職員室を出た一人は現在階段を上つている。

「三階にあるんだね」

フィリアがセツエイの後を追いながら言葉をかける。三階には一年生が使う教室があり、学年が上がるに伴い階が下がつていくのだ。

「ああ。俺は一階にいるから何かあつたら呼べよ」

セツエイが振り向いて言葉をかける。

「同じ教室がいいのに」

フィリアが柔らかな頬を膨らませる。実際、昨日頬擦りされたの

でその柔らかさをセツエイは知っている。思い出した瞬間に顔が赤くなつた。自分の免疫力の無さに溜息が出てくる。妹に頬擦りされて顔が赤くなる兄がどれだけいるのだろうかと心の中でつぶやいて階段を黙々と上る。

三階まで上がつて左に曲がつた所に「1 D」という表示が見えた。

「ここかー」

フィリアが瞳を輝かせる。こんな状態で大丈夫だろうかとセツエイは不安になつてくる。本当に同じクラスの方がいいような気さえしてきた。

「見かけない顔ね。おつとあなたは……これはし……失礼しました」教室から出て来た女子生徒が苦笑いを浮かべて教室に戻つていく。見慣れないフィリアを珍しがつたようだが、セツエイを見たらすぐに戻つていつた。セツエイは溜息をついて女子生徒の背中に声をかける。

「今日からこのクラスで世話になる、フィリア・ギベルティだ。よろしく頼む」

セツエイはぺこりと頭を下げた。女子生徒が驚いた顔をした。

「よろしくー」

フィリアが女子生徒に駆け寄つて抱擁。

「ちよつ……あなたいきなり！」

女子生徒は困惑をしている。助けを求める視線をチラリとセツエイに向ける。だがすぐに逸らした。

「大丈夫そうだな」

セツエイはフィリアの様子に微笑んでから、短くつぶやいて階段に歩を進める。

「…………聞いた話と全く違う。誰をも寄せつかせないクールな男と聞いていたのに」

女子生徒がつぶやく。もつと恐い人かと思っていた。だがあの微笑みは優しかつた。

「ていうか……あなたいいかげんに離れなさい！」

女子生徒がフィリアの抱擁から逃れるために肩を掴む。

「うー。コミュニケーションだよ」

フィリアが離れて寂しそうに肩を落とした。ふと周りの視線を感じた。見渡すと視線が自分に集まっている。見慣れない人物が教室内にいるのだ、注目されるのは自然だろう。

「フィリア・ギベルティです。皆さん的心を癒します」

フィリアが天使の笑顔で挨拶。女子生徒は呆然と見つめ、男子生徒の一部は笑顔を見ただけで心を擊ち抜かれたらしく歓迎の拍手をした。

特殊な空氣に満たされた教室にヒールの音が響く。

「ホームルームを始めるわ。席に付きなさい」

女性の声が教室に響く。現れたのはスース姿のアンジュ。生徒は驚きの顔をアンジュに向けた。

「諸事情により担任であつたヨハネス先生から、この私アンジュに担任交代したわ。よろしくお願ひするわ」

アンジュが柔らかく微笑む。生徒は戸惑いながらも席についた。「自己紹介は先ほどしていたわね。転校生のフィリアよ。皆、仲良くするように」

アンジュが短く言つてから、出席簿を開く。各自の名前を呼び、その後に授業が開始された。

*

昼休みを知らせるチャイムが鳴った瞬間にセツエイは席を立つた。

「そんなに急いでどこ行くの？」
声をかけたのはマックス。

「三階」

短く言い残してセツエイが教室の外を目指す。

「あんなにせかせかしたセツエイを見るのは久しぶりだなー。これ

は追跡だな

マックスがニヤリと笑い早足で後を追つた。

チャイムが鳴ったのを聞いたフイリアは辺りをキョロキョロと見渡していた。皆は一斉に席を立ち外に向かう。

「ばさっとしてないで行くよ」

女子生徒がフイリアに声をかける。黒髪のショートヘアに青い瞳を持った少女で、さっぱりとした性格は少し男性らしさを感じる。名前はリン・ネーベルトといつ。

「どこに？」

小首を傾げるフイリア。

「しょ・く・ど・う！」

リンは腰に手を当てて立腹の様子である。フイリアの腕を取つて立ち上がらせる。

「ご飯の時間なんだね。作るよー」

フイリアがのほんとした笑顔を浮かべる。

「あんたって天然？」

リンが瞳を細くさせて見つめてくる。これはかなりの重度。でも、これくらいの天然パワーが人の心を癒すには効くのかもしれない。

「いたつて正常だよ」

フイリアが拳を握る。

リンは頭が痛くなつてきた。そんな時に教室のドアが開く。黒髪にほつそりとした男。二歳しか違わないが普段からクールなイメージがあるためなのかかなり歳上に見えてしまう。リン視点では20代中頃に見える。

「やはり出遅れていたか

セツエイが溜息をつく。

「セツエイ、そろそろ説明しろよ。おつと、女子が一人……どっちが彼女？」

マックスが一人を交互に見つめる。ついでに品定めをしていくよ

うだ。

「妹の様子を見るためだ。彼女はいない」

セツエイがマックスの腹部に肘をめり込ませる。

「セツエイ……つっこみが激し……すぎる」

マックスが腹部を押されてから膝をついた。

「あ、セツエイだ」

フィリアがこちらに駆け寄つてくる。そのままセツエイにダイブ。

セツエイは何とか受け止めてから苦笑した。

「おつと……コミコニケー・ショーンもいいが、これは過度だな」

セツエイはフィリアから離れようとする。

「リンも嫌がるんだよ」

セツエイを解放してから頬を膨らませる。

「それは……ちょっと恥ずかしいから」

リンは顔を赤らめて頬を搔いた。

「お前、妹いたのかよ！ しかもこんなに可愛くて無邪気な子……

マクシミリアン・スレイブです」

マックスが恭しく礼をしてから名乗る。

「よろしくね！」

フィリアがマックスに微笑む。誰に対しても優しく微笑むフィリア。一つの長所だろうが、セツエイは不安を感じた。世の中には無邪気に笑う者も騙す奴らがいる。そんな輩に騙されないか不安で仕方ない。

「そろそろ行こうよ」

リンがフィリアの手を取る。

「セツエイも行こう」

フィリアが笑いかける。

「今からなら自販機で買った方がいいと思つが

セツエイが少女二人を交互に見た。

「だな。席を探すのが面倒だ」

マックスも一つ頷いた。少女二人は顔を見合わせてから、男性一

人に続いた。

一階に設置された自販機でサンドイッチなどを購入した4人は「3 C」という表示がある教室に入った。ここはセツエイが所属する教室。

「三年の教室は緊張します」

リンが怯えながら周りを見渡す。この教室に入つてからなぜか敬語になつているリン。よほど緊張しているらしい。

「楽にしていいよ。こっちにはセツエイがいるからな」

マックスが一人に笑顔を向ける。

「……俺任せというのはどういう了見だ」

セツエイが溜息をついてからタマゴサンドを齧る。

「セツエイがいれば問題ないよー」

フィリアも微笑んでつぶやく。話の内容は理解していないようだが、信頼されているのは素直に嬉しかった。

「あの……失礼ですけど……」

リンがセツエイとフィリアを見比べる。クールなセツエイに、のんびりとしたフィリア。全く似ていない。外見も黒髪に金髪。共通点を探す方が難しい。

「……本当に兄妹か……そう聞きたいのか？」

セツエイがリンを見てつぶやいた。まだ言葉にしていないのに先を越されてしまった。リンは緊張したまま一つ頷く。

「それは俺も聞きたいね。お前ら似てなさすぎ。それに妹がいたら絶対に気づく」

マックスも一人を見比べる。

「ふむ。実は昨日家に戻つたらいたんだ。そして、妹だと言うので置く事にした。実際に一人暮らしあ寂しい。フィリアがいてくれて癒されている自分がいるのは確かだな」

セツエイが瞳を閉じ、顎に手を置いて過去を振り返る。

「僕はセツエイの妹だよ。天使だけど」

「セツエイが一人に笑顔でさらりとつぶやく。二人は頷きかけて固まつた。

「ちょ……お前何を言つて！」

セツエイが慌てて立ち上がる。天使だと言つて信じる者はまずいだらう。だが、セツエイの慌てぶりはリアルだった。頬に伝う汗がその証拠。

「……マジ？」

マックスがセツエイを見る。

「そ……そんな訳ないだらう」

セツエイが引きつった笑顔を浮かべる。

「まだそんな事を言つの！ 昨日見たよね」

フィリアが頬を膨らませる。今にも翼を出しそうなフィリア。

「フィリア、落ち着け。あれは一般人に見せるのは危険だ。いろんな意味で」

セツエイがフィリアをなだめる。

「あー。この慌てようはマジだな。これで羽か天使の輪を見たら信じるね」

マックスが頭を搔いた。そんなに俺が焦るのが珍しいのかと、セツエイは心の中でつぶやく。

「むー。天使の威厳がかかっているよ」

フィリアが瞳を閉じる。「待て」と声をかけるよりも早く閃光が辺りを包んだ。あまりの閃光に三人が瞳を閉じる。瞳を開けた瞬間にフィリアに変化があった。フィリアの頭の上に神々しく輝く天使の輪があつた。

「これで分かつた？」

フィリアが三人に微笑む。セツエイは右手で顔を覆つた。

「マジだ……」

マックスがニヤリと笑つて天使の輪を見た。見てしまえば信じるしかない。

「触つていい？」

リンはゆつくりと天使の輪に指を向ける。

「いいけど……気をつけてね。結構切れ味すごいから
フィリアが頭を向ける。天使の輪はどうやら刃物の変わりになる
らしい。

「金属みたい」

リンが天使の輪に触れた感想を述べる。その時に笑い声が聞こえた。皆が帰ってきたのだろう。

「フィリア……お願いがある」

セツエイがフィリアの肩を掴む。

「何……こんな昼から真剣な瞳で」

フィリアが頬を赤らめる。

「それを消してくれ。三秒以内に」

セツエイが天使の輪を指差す。

「うー。まあセツエイの頼みなら仕方ないかな」

フィリアが瞳を閉じる。

閃光が教室を満たす。三人が瞳を開けた瞬間にはもう天使の輪は消えていた。その瞬間にクラスメイトが戻ってきた。

「セツエイ、何か光らなかつた？」

戻ってきたクラスメイトが首を傾げる。

「な……何もない。なかつた」

セツエイが激しく首を振る。

「そうか。お前が言うなら本当かもな」

クラスメイトが首を傾げたが納得したように席についた。

「うーん。どうやらばれたらいけないみたいだね」

フィリアが小首を傾げてつぶやく。

「はは……まさか仲良くなつたのが天使なんてね
リンは苦笑いを浮かべていた。

「あまり時間ないぞ。さつさと食べよ!」
マックスが時計を指差す。残り10分。

「5分で済ませる必要があるな」

セツエイは席についてサンディッシュを齧る。皆は黙々と食事を再開した。

*

昼休みが終わり現在は午後の授業。

「では、まずは装着してみて」

アンジュの声が教室内に響き渡る。フィリアの前には分厚そうな服がある。見た目は宇宙服のよつた、パワードスーツのよつた感じだ。皆は黙々と装着していく。

「これは……？」

フィリアが首を傾げる。

「外に出るために使う防寒スーツよ。これが無いと出られないから」リンがフィリアに説明。リンは何も知らないフィリアに一から説明してくれる。困っている人間を放つてはおけない、おせっかいな性格がリンの長所だ。短所もあるが。

外は極寒の地。防寒スーツが無ければ凍死してしまう。外での補修や、移動のために使用する事があるので必修科目である。この高等学校で習うのは生きるために必要な科目しかない。意味も理解せずに公式を丸暗記するような無駄な授業はしない。一般教養は中学までに終了させ、高校はここでの生活に必要な事を学ぶのだ。逆に大學は勉学のみ。ドーム型都市のシステム開発や、ドームを形成する物質の研究など、それぞれ特化した内容を現場に配属されて学ぶ事になる。

「まずは着てみよう」

フィリアは物珍しいスーツを着ていく。ふとアンジュがフィリアの側まで近寄る。

「そのスース高いから、着たまま羽を出さないでね」

アンジュが耳元で囁く。破かれたら問題なので先に釘を刺す。

「分かったよ」

フィリアが笑顔で頷く。

「装着が終わったわね。では、外まで移動！　5分以内」
アンジュが指示を出す。重そうなスーツを纏つた生徒が駆け足で移動。

「5分しかないの！　ここは外に出て飛ぶしか」

フィリアが窓の外を見つめる。

「おい……聞いてなかつたのか？　飛ぶな、出すな」
アンジュがフィリアの肩を強く掴んで睨む。スーツが軋む音がしたのは氣のせいだろうか。

「ごめんなさい」

フィリアが涙目で駆け出した。

*

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。じつやら登校初日は無事に終わつたらしい。安堵の息を吐いてセツエイは帰りの支度を始める。

「三階行くのか？」

マックスが問う。後ろを見なくとも分かる。絶対にこむけた顔をしている。

「様子だけは見る」

セツエイは無視してバックを肩にかける。

「妹には優しいねー」

マックスもバックを肩にかける。

「ほつとけ」

セツエイは早足に教室の外を指す。だが進路を塞ぐ人間が今日もいた。

「セツエイ・ギベルティ。今日こそは逃さん」

眼鏡をかけたほつそりとした体格の知的そうな男。

「……俺は忙しい。他を当たれ」

セツエイが横を通り過ぎる。

「ふむ。やはり直接交渉は無駄か。では、妹君を誘つといひよつ」
男は前を見たまま眼鏡を上げる。眼鏡が光を浴びて輝く。

「……俺はもう卒業なんだが」

セツエイが溜息をついた。

「君のような人材が部活もやらず、委員会にも所属していないのは大きな痛手。生徒会長としては黙つて見過じす訳にはいかない。少しは貢献したまえ」

生徒会長が振り向いてセツエイを指差す。

「フィリアがやるなら付き合おう。ただフィリアに害をなすのであれば全力をもつて排除する。覚えておけ」
セツエイは短く言つて教室を出て行つた。

*

フィリアは分厚いステッスルを脱いで一息ついた。今は汗でびっしょりになつた服を着替えるために女子更衣室にいた。隣で着替えているリンに視線を向ける。その瞬間にフィリアが驚愕の表情を浮かべる。

「どうしたの？」

フィリアは質問せずにいられなかつた。リンの腕には無数の傷があつた。リンは罰の悪そうな顔をした。

「あ……ごめん。見なかつた事にして」

リンがぎこちなく微笑む。周りにいた生徒は視線を外した。関わりたくないのだろう。だがフィリアはリンの腕をしっかりと掴む。
「話して」

フィリアがリンの瞳に直らの視線を合わせる。リンは視線を外す。

「…………」

リンが返したのは無言。フィリアは強くリンの腕を掴む。
「知り合つたばかりだよ。どうしてそこまで踏み込むの？」

リンは顔を落としてつぶやく。小さな肩は震えていた。

「力になりたいから」

フィリアは腕を放してリンを優しく抱擁。

「…………」

リンはしばし迷った。だが観念して口を開く。

「…………今から空いてる？あと…………出来ればあなたのお兄さんの力が借りたい」

「セツエイの？」

フィリアが首を傾げる。

「うん。頼りになりそなだから」

リンは弱々しくつぶやく。

「分かった。なら早く着替えないとな」

フィリアは素早く着替えてリンの手を取る。

「ちょ…………私まだ…………途中！」

慌てて体操服を下ろして、制服を羽織る。リンは中途半端な恰好で更衣室を飛び出した。

セツエイはフィリアの教室の前で壁に背をつけて待っていた。周りの一年生はセツエイを避けるように迂回していく。

「…………」

無言で待つこと5分。一人が姿を現した。

「セツエイーー、今日はさっそく活動だよ」

フィリアが元気よく声をかける。リンはフィリアが腕を放した瞬間に身なりを整えていく。

「フィリアちゃん、ナイス」

マックスがビシッと親指を立てる。リンの頬が見る見る赤くなる。

「活動とはなんだ？」

セツエイがとりあえず質問。

「いい？」

フィリアがリンの腕を取る。リンは戸惑つ。

「……俺は外した方がいいかな
マックスが背を向ける。

「そのようだな

セツエイがマックスの背に言葉をかける。

「あいよ」

マックスが片手を上げて去っていく。その背中を見つめてからリンが頷いた。フィリアがリンの袖をめぐる。見えたのは無数の傷。セツエイは傷を冷静に見つめる。

「……引掻いたような傷……か」

セツエイがつぶやく。癒ではない所を見ると虐待などの類ではなさそうだ。

「助けてあげたい」

フィリアがセツエイを見つめる。ざらり詳しい話は聞いていないらしい。

「協力はするが……フィリアが最後は何とかするよ」
セツエイがフィリアの頭に手を置く。フィリアが一つ頷いた。

*

一人はリンの後についでいく。案内されたのは一つの病室。白で統一された二人で一部屋の病室だった。そこで眠っていたのはリンと同じ黒髪の13歳くらいの少年と、8歳くらいの淡い金髪の女子。

「誰？」

少年が体を起こす。腕は触れば折れてしまいそうな細腕。頬はこけて蒼白だった。生きているのがやっとこうつ事はすぐに分かった。

「お姉ちゃんのクラスメイトと、そのお兄さん

リンが笑いかける。

「クレイン・ネーベルトです。姉がお世話をなっています

クレインがぺこりと頭を下げる。

「フィリアだよ。よろしくね」

フィリアが笑顔を向ける。その隣に立っていたセツエイは顎に手を置いて思考。チラリと視線をリンに向ける。リンは一つ頷いた。

「……俺はセツエイだ」

セツエイはクレインの青い瞳をしっかりと見た。クレインは優しく笑つた。

「クレイン……リンが来たの？」

女の子がベッドから体を起こす。焦点の合わない瞳をこちらに向ける。その瞳には光が宿つていなかつた。こちらが見えていないのだろう。

「うん。その他にも一人お友達が来たよ」

クレインが女の子に笑いかける。その瞬間に女の子は花が咲いたように笑顔を向けた。

「初めまして、フルレって言つの！　お姉さん？　お兄さん？」

フルレが何かを探すように手を伸ばす。その手をフィリアが包む。

「フィリアだよ」

フィリアが笑顔を浮かべる。

「新しいお姉さんだね。嬉しい。奥の方は？」

フルレが視線を向ける。見えていないが気配で分かるらしい。見えなくなつてから大分時間が経つているのだろう。

「セツエイだ」

二度目の自己紹介をする。それ以上言葉がでなかつた。こういう時にどう言葉をかけていいのかセツエイには分からなかつた。だが決して哀れみの目は向けない。彼らは必死に生きているのだから。

「よろしくね」

無邪気な笑顔をフルレが向ける。

「良かつたね。僕だけでは退屈だらうからね」

クレインがフルレに優しく微笑む。

「そんな事ない！　クレインがいれば……私は楽しいよ！」

フルレが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「それは光榮だね」

クレインは嬉しそうに微笑んだ。

「何かお話ししよう！」

フィリアが元気よく提案。フルレはしばらく考えてから口を開く。

「ねえ……お外に連れて行つて」

フルレが急に表情を引き締める。リンが肩を振るわれて一步後ずさる。

「外？　いいのかな？」

フィリアがセツエイを見た。セツエイは無言で首を振った。ともかく外に出られるような状態ではない。フルレもクレインと同じように病的に瘦せている。生死に関わる問題だ。

「駄目なんだ……お外行きたいな」

フルレが顔を落とす。

「外で何かしたいの？」

フィリアが問う。

話を聞けば何か出来るかもしれない。フルレは顔を真っ赤に口をパクパクと動かしている。少しこれからフィリアの耳に自らの口を寄せる。

「四葉のクローバーを見つけたいの……クレインにあげて病気がよくなつてほしい」

フルレがフィリアの耳元で囁いた。

「フルレは優しい子だね」

自分の病気のためではなくて、クレインのために外に出たい。どうにかして願いを叶えてあげたい。フィリアは拳を握つて振り向く。声を出そうとした所で顔を落としているリンが視界に入った。どうも様子がおかしい。

「……リン？」

フィリアが首を傾げる。

「いい？」

リンがセツエイとフィリアの手を掴んで病室の外に駆け出す。二人は戸惑つたが手を引かれるまま一緒に駆け出した。クレインは寂しそうに三人を見送った。

*

リンは一人の腕を掴んだまま無言で走る。一人は引っ張られるまま続く。一階にある待合室まで来た所でリンが止まった。

「どうしたの？」

フィリアが問う。リンは振り向かない。

「二人の病気は、閉鎖空間拒絶病か？」

セツエイがリンに言葉をかける。リンの肩が震えた。病名は仮でつけられたものだ。ドーム型都市に暮らし始めてから急に現れた病氣で、現在は分かりやすさを重視してこの名前が使われている。

「ええ。原因は分からぬけど……一人はドーム型都市に馴染めない。医師の説明では、日々衰弱して眠るように死んでしまうらしいわ。外に出れば治るけど……外では凍死してしまう。救う方法が見つからない私は……何もできない。フルレに……四葉のクローバーを見つける事すらできない……できないの」

リンの声はだんだん涙声に変わっていく。リンの袖口から見えるのは無数の傷。二人の発作を止める時の引焼き傷と、クローバーを探す時についたものだろう。一人でずっと背負つてきただしい。

「見つけようよ

フィリアがリンの背に言葉をかけた。刹那、リンが振り向いて潤んだ瞳のままフィリアを睨んだ。

「どうやつて！ ドームに自然はほとんどない！ 見つけても四葉のクローバーなんて簡単に見つからない」

リンが今まで溜めていたものを全てぶつける。フィリアは黙つて全てを受け止めた。

「一緒に探そう」

フィリアがリンを優しく抱きしめる。理不尽な怒りを受けても、全く変わらなかつた。フィリアの温かさと柔らかさが怒りを徐々に鎮めていく。もう叫ぶ事はできなかつた。

「うう……」

リンが声を押し殺して涙を流す。

「見つかるよ」

リンの髪を優しく撫でてつぶやく。

「う……うああ――――――！」

リンが堪え切れずに涙を流して泣いた。その様子を見てとりあえず安心したセツエイは顎に手を置いて思考する。自然がある場所、向かうための手段など考える事はたくさんある。だが思いつく場所は一つしかなかつた。

セツエイ達が足を向けたのは第三区の憩いの場である公園。公園の中央部には湖があり、ドーム型都市には珍しく人工ではない自然が広がっている。三人は人工で作られたジョギングコースを30分歩き湖にたどり着いた。

「……全部は見てないけど……ここは来たわ」

リンが顔を落とす。

「三人でなら全部見れる」

セツエイが学生服の上着を脱いでTシャツ姿になる。フィリアも上着を脱いで、ワイシャツの裾を折り曲げる。

「……諦めたらそこで終わりだね」

リンが上着を脱いで放り投げる。三人がクローバーを一つ一つ確認しながら歩き出した。

その様子を遠目で見ている人物がいた。アンジューである。

「癒すだけなら他の方法でもいいでしょうに……でも、あの子らしいわね」

一つ溜息をつく。三人は制服が汚れるのも構い無しに探し続け

る。

「……もう少しだけ見させてもらいうわ……あなたたちの想いを」
アンジュは気配を消して彼らを見つめ続けた。

*

時刻は午後10時。病棟の明かりは消えて光は枕元にあるほのかな明かりだけだ。

フルレは起き上がって同室の少年を見つめる。

「眠れない?」

クレインがベッドから体を起こして微笑む。

「うん」

フルレは顔を落としてから頷いた。どうしてもリンが気になる。私のわが今までリンを困らせているのは知っている。フルレは拳を握った。

「仕方ないな」

クレインが立ち上がりフルレに近づく。フルレの髪に温かい手が触れた。そして、優しく撫でてくれる。

「……私はクレインに何もできないね」

フルレが肩を震わせて泣いた。

「そんな事はないよ。もし、一人だったらとっくに諦めてた。今も生きていないとと思う。でも、フルレがいたから頑張れた。ありがとう」

クレインがフルレを撫で続ける。

「……ありがとう……クレイン」

フルレが顔を上げて微笑んだ。

*

時刻は午後11時。

セツエイは額に浮かんだ汗を拭う。チラリと視線を前方に向ける。フィリアは頬を土で汚して、肩で息をしていた。ずっと歩き続けている。無理もないだろう。

「……ごめんね」

ふとリンが弱々しくつぶやいた。これだけ探して見つからないのだ。申し訳なくて仕方ないのだろう。同じく土で汚れた頬には涙が伝っている。

「諦めたら駄目だよ」

フィリアがつぶやいてさらにペースを上げていく。リンを責める気なんて全くなかった。見つかるまで続けるつもりだろう。その姿を見たセツエイは体の内から力が沸いてくる気がした。

「諦めるものか」

セツエイもペースを上げる。リンは驚愕の目で一人を見た。まだ諦めない二人。見つけた所でこの一人に何のメリットがあるのか。ただフルレが笑顔で「ありがとう」と言つくらいだ。たったそれだけ。でも、彼らは必死だった。中途半端な意志なら先ほどのリンの一言で諦めていただろう。

「……私がやらなきゃ……私が」

リンは一人に倣つてペースを上げた。

「そろそろ大人げないかしら」

アンジュが一つつぶやいた。彼らの想いは受け取った。中途半端でない事も分かつた。ならばする事は一つ。

「……天界にいる天使はこの姿を見て非効率と笑うかしら。四葉のクローバーだけでの病気は治らないと。愚かだと笑うでしょうね」アンジュがスーツの上着を投げ捨て、ワイシャツを脱いで地面に置く。Tシャツ一枚になった背中には真紅の羽が姿を現す。

「私は愚かだと思わない。彼らを愚かだと非効率であると笑う者がいるなら……それは人でも天使でもない……ただの魔魔」

アンジュが背に生えた羽を一枚抜いて、天へと投げる。

「人のために必死になれる……そんな人間もまだいるのだと。どうかあなたの言葉で天界に伝えてあげて」

アンジュがつぶやく。真紅の羽が空を舞う。それを見届けてからアンジュは背を向けて羽を消す。破れたTシャツを気にせずにワイシャツとスーツを拾い、一度微笑んでからその場を去った。

*

フイリアは地面をじっと見つめる。一人もじっとクローバーを見つめていた。そんな時に何か硬いものに足を取られた。

「きゃあ！」

短く叫んでフイリアが地面に倒れる。視界はクローバーで埋め尽くされる。

「いたた……」

つぶやいた時に真紅の光が見えた。その光がフイリアの目の前で光って消えた。

「これは……？」

フイリアはこの赤さには覚えがある。アンジュの羽と同じ輝き。

「大丈夫か！」

駆け寄りながらセツエイが叫ぶ。

「何か光らなかつた？」

リンも慌てて駆け寄る。だが倒れたままのフイリアは起き上がりない。二人は心配になって、顔を見合わせる。次の瞬間にはセツエイがフイリアに駆け寄る。

「……見つけた……」

フイリアがぽつりとつぶやく。

「どうした？」

「見つけたよ、セツエイ！」

フイリアが目の前にある四葉のクローバーを抜いてから立ち上がる。

「これは……！」

セツエイがクローバーを見つめる。

「奇跡だわ」

リンが涙を浮かべて微笑む。

「見つけたよ——」

フイリアが一人に駆け寄る。三人は満面の笑顔を向けて抱き合つた。

*

翌日。二人の病室に訪れた三人は四葉のクローバーをフルレに手渡した。

「これが四葉のクローバー？」

フルレは見えないために分からないうらしい。フイリアがフルレの腕を取る。そして、一枚一枚に触れさせて数を数えさせる。

「本当だ！ 四つある」

フルレが歓喜の声を上げた。嬉しそうに笑うフルレをクレインは優しそうに見つめた。

「ほら……フルレ。次があるでしょ？」

リンがフルレに微笑む。フルレは顔を真っ赤にしてクレインの方に顔を向ける。

「どうしたんだい？」

クレインが微笑んで問う。本当は分かっている。何がしたいのかを。だがえて聞いている。意地悪ではなくて、フルレが渡しやすいようにするためだ。

「受け取ってほしい。クレインの病気がよくななるように」

フルレが笑つた。

「ありがとう」

クレインは立ち上がり四葉のクローバーを受け取つた。

「どうか……治りますようね」

フルレが天に祈る。リンも瞳を閉じて祈った。

「これで一件落着か」

セツエイはリンが浮かべる笑顔を見てから病室を去った。

「僕達、頑張ったよね。あと、お礼を言わないと」

フィリアが微笑んでから、遠くを見つめた。誰にとは聞かなかつた。こんな奇跡を使えるのはそうそういない。

「そうだな」

セツエイは短くつぶやいて自らが暮らすアパートに足を向ける。その夜、フィリアの羽が成長した。歓喜に踊るフィリアをなだめるのにセツエイはどんでもない労力を使う事になったのだつた。

天使と癒しの羽 2

天使と癒しの羽

2

「卵を割つて——クルリと丸めて——」

弾んだ歌声がセツエイの耳に届く。フィリアが卵焼きを作りながら歌つているのだ。歌詞は即興なのか、決まった歌詞があるのかは不明である。「ヒーを啜りながら楽しそうなフィリアの背中を見つめる。

「まあ、楽しそうならしいか」

セツエイは独語して新聞に目を落とした。

「セツエイ、ワインナーはタコさんでいいの？」

フィリアが振り向いて質問。

すでに切れ目が入りタコさんワインナーになっていた。どんな形でもいいのだが、高校生の弁当でタコさんワインナーはありなのだろうか。セツエイは苦笑してしまった。

「構わない」

「なんで笑うの。可愛いよ、タコさん」

フィリアが綺麗に出来たワインナーを箸で掴んで見つめる。何だか似合っていた。緩んだ頬が元に戻らない。

「ああ。可愛いかもな」

セツエイは微笑んで、そう言つのがやつとだつた。

「むー。まあいいや。残さないで食べてね。愛が詰まってるから」
フィリアは微笑んだ。

「ああ。全部食べるぞ」

セツエイはフィリアに温かく微笑む。

最近、セツエイは笑う事が多くなつた。これもフィリアの力なのか

もしれない。

「弁当が出来たら行こう。リンを待たせたらいけない」

セツエイが立ち上がる。

「うん！」

フィリアが一人分の弁当を詰める。それぞれの保冷用のバッグに入れて完了。セツエイは自分の分の保冷バッグを受け取る。

「今日も……癒そう！」

フィリアの元気な声と共に二人は外に飛び出した。

リンは左手の時計を見る。時刻は7時30分。ここから高校に歩いて5分。まだ余裕はある。リンは辺りを見渡す。碁盤目状に出来た何の面白みのない無機質な道。自然も見当たらない。

「待つのは退屈なんだよね」

独語して手鏡で髪型をチェック。寝癖は特にない。

「おはよう」

背後から飘々としたが聞こえた。手鏡を慌てて隠して振り向く。そこには真っ赤に髪を染めた長身の男がいた。確かセツエイと一緒に上級生。

「お……おはようございます」

リンが引きつった笑顔で挨拶。面識はあるが、あまり話した事はない。どう関わればいいのか分からぬ。

「そう緊張しなくていいよ。あいつらは……まだか」

マックスは頭を搔いた。

「はい。そろそろ来ると思いますよ？」

リンがとりあえず言葉を返す。後は何を言つていいか分からぬ。

「お、来たか」

マックスが視線を向ける。そこにはセツエイとフィリアがいた。

「リン——」

フィリアが地面を駆ける。リンが身構えるよりも早くフィリアが抱擁。

「……そっちの趣味あんの？」

マックスがリンを見つめる。リンは激しく首を振る。

「おはようーー」

フィリアがリンの頬に頬擦りする。本当に柔らかくてすべすべだ。
羨ましい限りである。

「おはよう」

セツエイがリンに挨拶。

「お……おはようございます」

リンがフィリアを強引に引っ張がして身なりを整える。フィリアは残念そうに一瞬だけ肩を落としたが、すぐに笑顔に戻る。

「行こう、セツエイ！」

フィリアがセツエイの手を取った。

「分かったから……引っ張るな」

セツエイが手を引かれて歩き出す。4人は高校に向けて歩き出した。

4人が高校の門にたどり着いた時に眼鏡をかけた細身の青年が道を塞いだ。輝くような銀髪は嫌でも視界に入る。セツエイは溜息をついた。

「見つけたぞ……セツエイ・ギベルティと……その他諸々」
生徒会長が眼鏡を上げる。

「なんだ」

セツエイが溜息をついた。朝から疲れる人物に遭遇したものだ。セツエイに対して部活に入れ、生徒会に入れとうるさいのだ。そろそろ嫌気が指してきている。

「その他諸々って……」

マックスとリンが肩を落とす。全く眼中にないらしい。

「むー。フィリアだよ！」

フィリアが拳を上げて抗議。

「これは妹君。どうだね……生徒会に入らないか」

生徒会長が素早い身のこなしでフィリアに接近。細い両肩をがつしりと掴む。

「生徒会?」

フィリアが首を傾げる。

「ああ。生徒のために尽力する組織さ」

生徒会長が右手を上げて爽やかに宣言。

「その分……無駄な労力がかかる……がな！」

セツエイが生徒会長の左腕を掴む。この細腕のどこにこんな力があるのか、ミシミシと不快な音がする。

「痛い……痛い！ 折れる！」

生徒会長が叫ぶ。フィリアの左肩を離した所でセツエイは腕を解放。

「セツエイ、乱暴は駄目だよ」

フィリアが頬を膨らませる。

「そうだ。私は対話によつて交渉を進めている。そうだね、妹君」

生徒会長が眼鏡を上げる。勝ち誇った笑顔がどうも気に障つた。

「そうだったな。後でいいか？」

セツエイが生徒会長に微笑む。だが、その微笑からは殺氣しか感じられない。マックスとリンが震えて肩を抱いた。フィリアは殺気に全く気づいていない。

「仲直りだね」

笑顔で笑つたセツエイを見て、仲直りしたと思つたらしく満面の笑顔を向けるフィリア。ここまで天然なのも驚きである。

「くつ……ここは一時撤退だな」

生徒会長が背を向けて早足で去つて行つた。

「なんだつたんだろ?」

フィリアが首を傾げる。

「あなたには敵わないわ」

リンがフィリアに微笑む。

「だな」

マックスも微笑む。フイリアはそんな一人を見つめるのだった。

*

セツエイは防寒スーツを着込んでドームの外壁を無言で上っていく。背には補修用の四角い外壁を背負い突起物に足や手をかけて口ツククライミングのように上っていく。遅れてマックスも上ってくる。今は外壁の交換作業の実習中だ。実習といつても実際に古くなつた外壁を交換するため、実戦的な作業である。

「ペースが早い。落ちたら即死なんだぞ」

マックスが通信用のイヤホンマイクを使ってセツエイに言葉をかける。先を進むセツエイが動きを止めてマックスを待つ。マックスは安堵の息を吐いた。本日の実習は恐くて下を見れない。もう何度も外壁を上つた。慣れもある。だが、今日は特別だった。

「今日は動いているからな」

セツエイが言葉をつぶやく。

マックスが肩を震わせた。危うく手を滑らせそうになつた。セツエイの言葉通り、現在ドーム型都市6は動いているのだ。雪で覆われた大地をホバー走行している。以前はキヤタピラをつけて進んでいたらしいが、キヤタピラが地面に引っかかりドーム内に甚大な被害が出る事が多々あり、ホバー走行に変更。どうやつてこんな物体を浮かせているのかは学生である自分達は知らない。今、分かる事は落ちたら取り残されるという事だ。その前に落ちた瞬間に死んでしまうかもしれないが。

「よく平氣でいられるな」

マックスがセツエイの隣まで上つてきた。

「安全帯はあるが俺だって恐いさ。さつさと終わらせたい」

セツエイが正直な感想を述べた。マックスは即座に同意。だが焦る事はしない。

「セツエイ、マックス班……目的地に到着」「ほどなく上つてからセツエイが教師に報告。

「了解。ページする」

教師の声と共に外壁がページ。ページされた外壁が重力に引かれて落下。

「こえ———」

マックスが震えてつぶやく。

監視モニターで外壁が生徒に直撃しないように見張っているとは言え、現在でも上つてている生徒はいる。上つている生徒の一部が恐怖で腕を滑らせる。それをパートナーの生徒が手を伸ばして掴む。他にも安全帯にぶら下がり助かつた生徒もいた。

「……なぜ数十億も人が死んだか改めて理解した」

セツエイは独語して、ページされた外壁の左側から体を近づける。マックスも続く。

「作業に入ります」

セツエイが報告するとページされた外壁の下に足場が形成。広さんは人が一人通れるほど。緊張した面持ちで足場を踏む。ようやく地に足がついた。

「やはり俺らは地上の人間だな」

マックスが安堵の息を吐く。

「冗談言つてないで……やるぞ」

セツエイが背に固定した新しい外壁を外す。二人で持つてさつそくはめる。力チッと音が鳴り固定されたのを確認してゆっくつと手を離す。

「いいのか……いいんだよな?」

マックスは生唾を飲み込む。

「ああ。何度やっても慣れないな、この作業」

セツエイがつぶやく。

「交換を確認。帰りも気をつけろ」

教師の言葉を聞いてセツエイは降り始める。音を立てて足場が床

つっていく。

「降りるの……」えー——

マックスは震えながらつぶやいた。

ドーム型都市6の高さは約1000メートル。一人がいる高さは約210メートルの高さ。下を見たら終わりである。震えて動けなくなる。この実習は動けなくなつた者の救助も入つてゐる。一回の実習で二、三人は動けなくなるので気は抜けない。

中には2000メートル級のドーム型都市もあるというのだから、このドーム都市での作業はましな方なのかもしない。

「もう少しだ」

10メートル降りた所でドーム内部に入るためのドアが視界に入った。ドアを抜け一方通行の通路を10メートルほど進むと昇降用のエレベータがある。

「助かっただ——」

マックスが安堵の息を吐いた。セツエイも安堵の息を吐こうとした瞬間に顔が青ざめる。外壁がパージする音が聞こえたのだ。

「セツエイ、マックス班、至急、ドア内部に入れ！」

教師の叫び声を聞いてセツエイは、ドアの隣にあるスイッチを押す。音を立ててドアが開く。チラリと横を見るとマックスは青ざめたまま固まっている。

「ちつ……」

セツエイは舌打ちをしてドア内部に入る。そして、手を伸ばす。

「マックス！」

セツエイが叫ぶ。

正気を取り戻したマックスが手を差し伸べる。掴んだ瞬間にセツエイは手を引いた。マックスがセツエイに飛び込むようにしてドア内部に体を入れる。

「閉めて！」

セツエイの叫びを聞いてドアが閉める。教師が遠隔操作したのだろう。突如、突風に似た激しい風がドアを激しく揺らす。おそらく

外装が通過したのだろう。

「……今日はさすがに焦つたな」

セツエイが額に浮かぶ汗を拭う。

「…………」

マックスは放心状態。無理もないだろう、死にかけたのだから。
「セツエイ……悪いのだが、もう一度外に出てくれ」

教師の声を聞いてセツエイは嫌な予感がした。言われた通り外に出ると、生徒は恐慌状態。まともに動ける人間がほとんどいない。後ろを振り向くとマックスも動けない。

「…………」

セツエイは外に出て救助活動を開始。教師が現場に来るまでセツエイは動けないクラスメイトを一人ずつ移動させるという手間のかかる作業をする事になつたのだった。

調査を進めた結果。落下した外装は古く劣化していたらしい。振動で外れ落下。直撃した者はいなかつたが、今後は交換の周期を早めるという事で話がまとまつたらしい。つまりこの実習の数も増えるという事だ。一同は深い溜息しか出なかつた。

*

昼休憩。セツエイはフイリア作成の弁当を食べていた。

「今日から弁当か……ていうか可愛いな、おい」

復活したマックスがすかさず指摘。本日のヒーローであるセツエイに眸が注目。セツエイが箸で掴んでいるのはタコさんワインナー。

「……フイリアが作つたんだ。俺の意思は入つてない」

セツエイが若干顔を赤めてつぶやく。

「お前がそこまでシスコンだとは思わなかつた」

マックスが腹を抱えて笑う。他のクラスメイトも笑いを堪えていた。

「さ……さつさと行け」

セツエイがマックスを追い払つ。ちょうどビタの時に見慣れた金髪が視界に入った。

「食べよーー」

なぜか目安箱を持つたフイリアが元気な声で教室に入つてくる。皆が注目。これが噂の妹。その後ろからはリンが遠慮がちに入つてくる。

「なるほど。これは、あの弁当になるな……」

「可愛いもんね」

クラスメイトが納得して教室を出て行く。セツエイは再度溜息をついた。今までのクールなイメージはもうない。今は優しく頼れるお兄さんキャラとして扱われている。いいのだが悪いのだが。セツエイには判断できなかつた。

「ねえ、セツエイ」

フイリアが席につき弁当箱を開けながらつぶやく。セツエイは言葉を待つた。

「生徒会の事?」

リンがフイリアに問う。フイリアが一つ頷いた。

「ほう……また性慾りも無く……」

セツエイがぽつりとつぶやいた。隠れて左拳を握る。あの生徒会長は一度徹底的に叩きのめす必要があるらしい。

「えっと、違うんです」

リンはセツエイが何を考えているか察して訂正する。セツエイは眉根を寄せる。また奴が現れたのではないか。

「生徒会みたいな事できないかな?」

フイリアがセツエイに問う。

「ふむ。要領を得んな」

セツエイが顎に手を置いて思考。そもそも生徒会は何をやつている。年間行事を消化しているくらいしかイメージがない。

「えっと……これとか」

フイリアが持ってきたダンボールに紙を貼り付けただけの目安箱

を掲げる。

「心を癒すなら……目安箱みたいな物で募集をしようかと……駄目ですかね」

リンがセツエイに視線を向ける。

「生徒会が黙つてるのは思えないな」

セツエイが腕を組んでつぶやいた。どうせなら一緒に活動をしようと説得してくるだろう。

「どうしよう。この高校に通う人を癒してあげたいだけなのに。難しいね」

フィリアが肩を落とした。

セツエイは瞳を閉じる。生徒会に取り込まれれば他にやる事が日々ある。片手間で人の心を癒すなど無理だ。中途半端に関われば逆に傷つけてしまうかもしれない。リンもセツエイに視線を向ける。

「募集……手段……」

セツエイは思いついた事を口にしていく。セツエイ自身もそう長くこの高校にはいられない。その間に定着させなければいけない。

「これだけでも置ければな」

フィリアが目安箱を見つめる。

「……いや……置く必要はない」

セツエイが瞳を開いた。

「置く必要はない……んですか？　なら、どうやって？」

リンが手段を問う。

「まずは……俺とフィリアで愛好会を作る。張り紙を行い……困り事がある生徒に来てもらう」

セツエイがフィリアに言葉をかける。落ち込んでいたフィリアは元気を取り戻していく。

「ありがと、セツエイ！」

フィリアがセツエイを抱擁。嬉しそうに頬擦りする。

「大変だぞ。生徒会みたいに有名ではないんだから」

セツエイが溜息をつく。誰も来ない可能性がある。何の活動もし

ていよいよ愛好会は潰されてしまつ。それまでに結果を残さねばならないのだ。だが道は見えた。

「出来るよ、僕達なら

フィリアが嬉しそうにうぶやく。

「…………」

リンが頬を膨らませてセツエイを睨む。腕を組んで立腹の様子である。

「どうした？」

セツエイがまずは問う。

「分からないんですか？」

リンの言葉には棘がある。セツエイは首を傾げる。フィリアはキヨトンとした顔でリンを見ている。

「私も混せてくださいよー！」

ビシッとセツエイを指差す。セツエイは驚いて目を見開いた。

「いいのか？」

セツエイはリンを見つめる。フィリアはセツエイを解放して、リンに潤んだ瞳を向ける。

「当たり前です。お世話になつたんですから」

リンが恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「リン――――

次はリンに抱きつくフィリア。

「ちょっと……もう仕方ないなあ」

リンがフィリアを受け止める。嬉し涙を流すフィリアの頭を優しくリンが撫でる。

「俺がいなくなつても大丈夫だな」

セツエイはつぶやいて優しく微笑んだ。

*

放課後。いつの間にか消えたセツエイを探してマックスは廊下を

歩いていた。

「うん？」

マックスが首を傾げる。田の前には何やら張り紙を張っているりんがいた。近づいて張り紙を見る。

「癒し愛好会……あなたの心を癒します。悩み事、困り事、何でも解決！ 参加メンバー、セツエイ・ギベルティ、フイリア・ギベルティ、リン・ネーベルト」

マックスが読み上げる。

「新しく愛好会を作りました」

リンが頬を赤らめてつぶやく。

「へえーー、普通なら無視するだろうけど……これならいけるな

マックスがニヤリと笑う。リンが首を傾げる。

「じゃあな

マックスが手を振つて去つていぐ。リンは首を傾げて、張り紙を張る作業に没頭した。

*

あれから一日経つた放課後。

校舎の右隣にあるクラブハウスの一室を手に入れた三人は温かい緑茶を飲んで来客者を待つ。この部屋にあるのは机四つと椅子のみ。他には緑茶の茶葉と、急須、湯沸し用のポッドくらいだ。余分な物はできる限り置かないようにしている。突っ込まれたくないからである。

そんな時にドアがノックされた。セツエイは溜息をついた。おや

らく奴だ。

「はーーい」

フイリアが元気のいい声を出して、ドアを開ける。

「これは妹君。今日も元気だね。その元気を生徒会で使わないかい？」

生徒会長がフイリアに微笑む。

「僕はこの愛好会の活動があるから」

きつぱりと断る。生徒会長は悔しそうに拳を握った。

「と言うがこの「A」何か活動したのかね」

生徒会長が眼鏡を上げる。

「Cで勉強か……読書くらいしかしてませんね」

リンが微笑んで、読んでいた本から視線を上げる。

「ならば……私の権力を持つて解散だな。安心しろ、全員……生徒会で拾つてやるわ！」

生徒会長が勝ち誇った笑みを浮かべた。

「残念だな……どうやら解散はなさそうだ」

セツエイが生徒会長の後ろを指差す。そこにいたのは小柄な少女。淡い金髪に眼鏡をかけた大人しそうな少女だった。どうやら一年らしい。

「花粉症か？」

セツエイが少女を見ていぶかしむ。少女は小さな鼻を真っ赤にして、時折くしゃみをしている。

「く……Cには一時撤退だな」

生徒会長が悔しそうに去つて行つた。頼むからもう来ないでくれ。

「花粉症ではないんです……ただ猫アレルギーで……」

少女が弱々しく微笑んだ。

「まずは座つて……私は「C」のリン・ネーベルト」

リンが挨拶をして席に促す。少女は頷いて一番手前の席に座る。隣にはフイリア、正面にはリン、右斜め前にはセツエイが座つている。

「私は「C」のノイス・ローランドです。今日は相談があつて……個人的な事なので生徒会には頼めなくて」

ノイスが顔を落とす。

「個人的な事……猫アレルギーか？」

セツエイが質問。ノイスが一つ頷いた。

「一日前に弟が子猫を拾つてきたんです。私も最初は家族が増えたと思ったんですが……」

ノイスが溜息をついた。だいたい分かつてきた。

「ノイスは猫アレルギーだから飼えない。飼い主を探してほしいとリンが確認。ノイスが頷いた。だが顔を上げない。

「まだ何があるな？」

セツエイは顎に手を置いて思考。手伝う人間が増えれば少しあは元気になるものだ。だが、ノイスは元気を取り戻さない。

「はい。私が体調を崩して……猫をどうするかと家族で相談したんです。弟は飼いたかったみたいで、捨てるのを反対したんです」

ノイスが語り出す。セツエイは黙つて言葉を待つ。

「私が苦しんでいるのに飼いたい……と言う弟の反応に父親が怒つてしまつたんです。弟は一度決めたら、なかなか考えを変えない子で……」

ノイスがそこまで言つて言いよどむ。

「喧嘩になつたか……これは予想だが……家を飛び出したな」

セツエイがノイスを見ながらつぶやく。皆が一斉に目を見開いた。「当たりです。猫を抱えて家を出でしまつて……ただ連れ戻すだけでは駄目なんです。新しい飼い主も探さないといけなくて……弟も説得しなくてはいけなくて……どうしたらいいか分からなくて」

ノイスが涙を堪えてつぶやく。原因は自らの猫アレルギー。当然ノイスの責任ではない。だが、どうしても自分を責めてしまうのだろう。

「それでここに来たか……どうする？ 聞くまでもないが」

セツエイが今まで黙つていたフイリアに問う。

「僕達で解決させるよ。まずは弟さんを見つけよ！」

フイリアが微笑んでノイスを見つめる。

「場所はどこだろ？」

リンが首を傾げる。セツエイは一度瞳を閉じる。

「おそらく公園だと思います！ その猫を拾つたのも公園でしたか

「らー！」

ノイスが拳を握つて叫ぶ。

「なら……行こう。癒し愛好会、活動だよー。」

フィリアが拳を掲げる。

「ああ」

「うん！」

セツエイとリンも倣つて拳を掲げた。

「……来てよかつた」

ノイスは三人を見て微笑んだ。

最初は「セツエイ・ギベルティ」という名前を見てここまで来た。この高校に通つている者でこの名前を知らない者はいない。部活にも委員会にも入つていながら、どの部も委員会も欲しがる人材だと聞いている。実際に会つてみて大人のような人だと思った。大学生と話をしているような感覚がする。

「行くよ」

フィリアがノイスの手を握る。温かい手だった。そして、元気付けてくれる優しい笑顔。

「はい」

ノイスは頷いて立ち上がる。今までが嘘のように晴れやかな気分で頷く事ができた。これはこの子の力なのだろう。この愛好会はセツエイだけで成り立つてはいないとノイスは直感的に思った。おそらくこの子が動かしている。この子がいなくなつたらバラバラになつてしまつ。そんな気がした。

四人は公園まで迷わず直行。ノイスを先頭にして人工で出来たジヨギングコースを進んでいく。

「……ここに来ると涙が止まらないな」

リンが目元を拭う。三人で探した四葉のクローバー。今はクレインが押し花にして大切に保管している。フルレの祈りがこもった宝物だと言つていた。

「さて……公園はいいが

セツエイが周りを見渡す。このまま真っ直ぐ行くと湖に出る。ノイスが進んだのは左側。

「この先は何があるの？」

フィリアが首を傾げる。

「こつちは……希望の庭だよ」

リンが微笑んでつぶやいた。ノイスも微笑む。フィリアは首を傾げた。

「……以前あつた植物を可能な限り復元した庭だ」

セツエイは淡々とつぶやく。

「花……嫌いなんですか？」

リンがセツエイに問う。セツエイが視線を向ける。一瞬、ドキリとした。そういうえば直接会話した事がほとんどない。つい場の流れで質問してしまった。

「嫌いではないが。好き好んで見ようとは思わない」

セツエイは前を向いたまま答えてくれた。リンは安堵の溜息をついた。頭では分かっているのだ。恐い人ではないと。本当に恐い人だったら、こんな所まで来ないだろう。リンは一度深呼吸をしてから微笑んだ。

「なんだ？」

セツエイは戸惑いながらつぶやく。

「何でもありません。優しい人だなっと思つただけです」

リンがセツエイに微笑む。セツエイは一度首を傾げただけで、それ以上は口を開かなかつた。5分ほど歩くと、色鮮やかな花々が可憐に咲いていた。どこを見渡しても花。心が洗われる光景だつた。その中心部に一つのベンチが見えた。そのベンチには6歳くらいの男の子が座つていた。

「見えた……あの子かな？」

フィリアが男の子を指差す。膝の上では黒い毛をした子猫が心地良さそうに眠つていた。

「はい。フレン！」

ノイスがフレンと呼んだ男の子に呼びかける。フレンと呼ばれた男の子がノイスを見て驚いて目を見開いた。逃げようにも猫が膝の上にいる。戸惑っている間に四人はフレンの正面に立った。フレンは顔を落として、気持ち良さそうに眠る猫を見つめた。

「何しに来たの？」

フレンの第一声はこれだつた。

「お姉ちゃんはあなたが心配で」

ノイスが肩に触れる。

「ほつといてよ。お姉ちゃんもあつちの味方でしょ…」

フレンが顔を上げて叫ぶ。あつちと言ひのはおそらく父親の事だらう。

「違うよ。君を何とかしたいと相談しに来たんだよ」

フイリアがフレンの瞳を覗きこんで優しく微笑む。

「……誰？ 相談？」

フレンが戸惑う。

「私はフイリア。こつちが兄のセツエイ、こつちがリンだよ」

フイリアが自己紹介。皆が一度頷く。

「何しに来たの？ こいつを捨てるの？」

フレンが猫の背を撫でる。猫が気持ち良さそうに身じろぎをした。

「こんな可愛い子を捨てるなんてしないよ」

フイリアが笑顔で猫を撫でる。猫は一度欠伸をしてから目覚めた。フイリアを見るなり嬉しそうに「にゃー」と鳴いた。敵意がないと分かつたのだろう。

「ならどうするの？ こいつを連れて帰つたら……お姉ちゃんが…

フレンが顔を落とす。ノイスも顔を落とす。

「新しい飼い主を探す」

今まで黙つていたセツエイが述べた。フレンが顔を上げる。

「嫌だ！」

…

フレンがセツエイを睨みながら叫ぶ。

「……では、このまま一人でいるか？」

セツエイはフレンの瞳を真っ直ぐに受け止める。

「家族が離れ離れなんて悲しいよ」

フレンがフレンの手を握る。フレンは先ほどまでの勢いを無くして再度顔を落とした。

「一度と会えない訳ではないんだよ」

リンがフレンに語りかける。

「新しい飼い主は一緒に探すから……帰つて来て」

ノイスもフレンに語りかける。猫の背に涙が数滴落ちる。猫はフレンを見つめて弱々しく鳴いた。

「……俺達が優しい飼い主を探す。だから安心しろ」

セツエイが微笑んで、最後の一押しをした。

「こいつも……その方が幸せかな」

フレンが猫の背を撫てる。猫は分からぬのか首を傾げるだけだった。

ノイスとフレンを家まで送ったセツエイは背を向けて歩き出した。セツエイの担当はこの辺りだ。

「猫を善意で飼ってくれる人か……」

セツエイはつぶやいた。

そんな人がいるのだろうか。最悪はセツエイとフレリアで飼うしかないだろう。だが、住んでいるアパートはペット禁止である。新しいアパートを探すのは骨が折れそうだが、約束した手前責任はとるべきだら。

「ふう……愚痴を言つても仕方ないか」

セツエイはとある家の門の前に立ちインター ホンを押す。数秒待つてインター ホン越しに40代ほどの主婦の声がした。

「申し訳ありません。今、猫の飼い主を探しているんです」

セツエイが語りかける。

「他にして。そんな余裕ないわ」

冷たい言葉と共に受話器を降ろす音が聞こえた。当然の反応だ。そう簡単に当たりを引けるとは思っていない。セツエイは順番にインターホンを鳴らしていく。何度も断られても。

10軒ほど断られた所でポケットに入れてある携帯が鳴った。セツエイはほとんど携帯を使用しない。もともと知人が少ないからだ。戸惑いながら通話ボタンを押して耳に当てる。

「も……もしもし、そちらはどうですか？」

緊張したリンの声が聞こえた。離れて活動するため番号を交換しておいたのだ。まさかこんなに早く役立つとは思ってもいなかつた。

「10軒ほど断られた。そちらは？」

セツエイが問う。

「私とフィリアで20軒は聞きましたが……駄目です」
リンの沈んだ声が返ってきた。

「以前のクローバー探しと同じだな」

セツエイは思い出してつぶやく。

「諦めなければ……見つかりますよね」
リンの言葉に力が戻る。

「ああ。もう少し探そう」

セツエイはつぶやいて通話を終了させた。前を向いて再度インターホンを押した。

アンジュは気配を消してフィリアとリンの背を見つめる。

「次は……猫の飼い主探し」

アンジュは一人を見て微笑んだ。本当に手間がかかる事が好きだと思う。

「……ごめんなさいね。名乗り出てあげたいけど……私は動物苦手なのよね」

アンジュが溜息をついた。羽を齧られたら堪らない。背を見つめながら猫が好きな生徒を思い浮かべる。

「そういえば……あの赤い髪の三年生……名前なんだつたかしら。動物が好きだと黙ってたわね。最近、飼つてた犬が死んだとか何とか……」

アンジュが思い出す。名前と住所を確認するために、高校に足を向けるアンジュだった。

*

ドームの天井を越え、雲を越えた先にある場所。光に満ちた天使の楽園である天界。

雲の上に作られた神殿の床に素足で着地したのは法衣を纏つた天使。目の前には四翼の天使が背を向けて立っていた。天界では異形を嫌う。基本的な姿は両翼の天使である。だが羽は神力の塊。羽が多ければ多いほど力は強い。圧倒的な力で天使のトップに君臨し続いているのは天使長アーバン。眩しい黄金色の髪を腰まで伸ばした端正な顔立ちの男で、手足は鍛えられ無駄なく引きしまっている。

「どうした？」

天使長アーバンは振り向かずに問うた。

「下界に降りた……フィリアですが……心を癒し、羽を取り戻しているようです」

後ろに立つた天使が報告。

「ほう。慈愛の天使の娘がか」

アーバンは瞳を閉じた。瞳は閉じているが、今は全てが見えている。下界で必死に猫の飼い主を探すフィリアをしつかりと見ていた。

「非効率だな」

アーバンは一言で断定した。もっと効率がいい方法などいくらでもあるだろうに。

「……いかがします？」

天使が問う。

「捨て置け。私は慈愛の天使のやり方は認めん。我が妹……堕天使

アンジューの考え方もな

アーバンは拳を握つてつぶやく。その声には怒りすら含まれていた。報告した天使は一度礼をして羽を羽ばたかせた。

*

フィリアは無邪気な笑顔を浮かべてインター ホンを押す。

「すみませーーん。猫を飼わないかな?」

インター ホンに元気に語りかけるフィリア。

「…………」

無言で受話器を降ろす音が聞こえた。フィリアは仕方なくインター ホンから離れる。

「…………もう知人に頼み込むしかないかな」

リンが溜息をついた。以前に動物を飼っていた人にはすでに話をしたが断られている。もう一度頼んでみるしかないだろう。

「あ……もしもし、リンだけど…………」

「もしかして……まだやつてるの? 信じられない

緊張した面持ちで電話をしたリンは驚いて目を見開いた。まさかこんな反応が返ってくるとは。

「うん……まだ見つかなくて…………」

「一度……断つたよね。切るけどいい?」

「うん…………」

リンは謝罪して通話を終えた。これだけ人は冷たかっただろうか。

フィリアに触れて温かさばかり感じているから感覚がズレてきているのかもしれない。リンは携帯を握り閉めた。

「元気だして」

フィリアがリンの手を包む。何度断られても元気に笑うフィリア。落ち込むリンにも優しく微笑んでくれる。皆がフィリアみたいに優しくなれば、平和になるのではないかとリンは思った。実際は無理なのだろうが。

「お……いたいた」

リンが顔を上げた瞬間に聞き覚えがある声がした。二人が振り向くと、Tシャツにジーンズ姿といつラフな私服姿のマックスがいた。

「どうして？」

リンが首を傾げる。

「いや……俺もよく分からんのだが。アンジュ先生が話を聞いてあげてと言つからさ。セツエイに電話したんだけど……繫がらなくて。苦労したよ」

マックスが笑つた。時刻は午後9時半を越えている。こんな時間にわざわざ外に出て自分達を探してくれたらしい。

「猫の飼い主を探してるの。誰かいないかな？」

フィリアがマックスに問う。

「あー、なるほど。そういう事か。てか、お前らまずは俺に言えよ！」

マックスが叫んでうな垂れる。

「え？」

少女一人が顔を見合わせた。

「俺は動物好きなんだよ。最近、飼つてた犬が……亡くなつてな。新しいペットを探してた所だ」

マックスが笑う。

「それなら……いいの？」

フィリアの瞳が輝く。

「ああ。構わないぜ」

マックスがニヤリと笑う。

「ありがとう！」

少女一人がマックスに飛付いた。

「おつと……そんなに喜ぶ事か？」

マックスは一人を受け止めて笑つた。

「だつて……もう何軒聞いた事か……」

リンが顔を落とす。

「それだけペットを飼うのは大変なんだ。中途半端に承諾したら…」最初は可愛いが、すぐに飽きてしまう。結果は捨てるという最悪のケースになる

マックスが悲しそうな顔をした。

「……」

少女一人は返す言葉が見つからなかつた。

「ま……今日は運がよかつたな」

マックスが一人の頭を撫でた。一人はしばし考えてから頷いた。

*

セツエイは断られ続けていた。だが、機械的にインター ホンを押して頼み続けている。周りの住民からは奇怪の目で見られていた。

「少し離れすぎたか」

セツエイは冷静さを取り戻して独語した。ここから歩いて戻るのは1時間くらいかかるだろう。そんな時に携帯が振動している事に気づいた。何やら着信履歴に「マックス」、「リン」、そして謎の番号があつた。とりあえずリンに電話をする。

リンが語った内容は飼い主が見つかったという事だつた。そして、その名前を聞いた瞬間に全身の力が抜けた。

「……俺もまだまだ……だな」

セツエイは自嘲の笑みを浮かべて立ち上がつた。ここから戻るのは大変だが見つからずに歩き続けるよりかは何倍もよかつた。今は役に立つていらない気がするが、解決したのならいいと思う、セツエイだつた。

*

三人はノイスに連絡をして家まで向かつた。ノイスとフレンも猫の飼い主を探していたらしく、家の前で待つ事になつた。

「もう午後10時か」

マックスがつぶやいた。

「ごめんね」

フィリアが頭を下げる。

「いいさ。そういうえばセツエイは？」

マックスが問う。姿が見えない。

「30分前によりやく連絡がつきました。だいぶ遠くまで行つてゐみたいですね」

リンが苦笑いを浮かべた。

「……真面目だねえ」

マックスが笑つた。奴らしいともマックスは思つた。

「皆さん！」

声に向けて三人が振り向く。そこにはノイスと猫を抱えたフレンがいた。

「見つけたよ——」

フィリアが手を振る。

「あなたがマクシミリアンさんですか？」

ノイスが確認する。

「マックスでいいよ。ついでにセツエイのクラスメイトだ」

マックスがニヤリと笑つた。

「セツエイさんには何と礼を述べたらいいか」

ノイスが涙を拭う。

「いや……今回あいつ……何もしてないから」

マックスが笑う。

今はこちちらに向かつて走つているだらうか。セツエイにも出来ない事はある。マックスはセツエイなら何でも出来ると思っていたが、どうやら違うらしい。急にセツエイが人間らしく思えた。

「大切してくれる？」

フレンがマックスを見つめる。

「おう。任せろ。でも……一つ約束しろ

マックスが屈んでフレンの瞳に血の塊を叩かせる。

「な……なに？」

フレンは緊張した面持ちをした。

「様子……見に来いよ

マックスがフレンの髪をクシャクシャと撫でる。

「そんなの……当たり前だよ。」

フレンが叫ぶ。

「いい返事だ」

マックスが笑う。それから猫の首根っこを捕まえる。猫はしばし暴れたがマックスの腕の中に納まつた。

「よろしくな……名前……ビリジョウナ……」

マックスが猫を撫でながらつぶやく。猫は首を傾げて一度鳴いた。

「名前は……ブラックだ」

フレンが顔を真っ赤にしてつぶやいた。

「黒いから……ブラックね。かつこいいじゃないか。あいよ

マックスがブラックを掲げて微笑んだ。

「またな……会いに行くよ

フレンが手を振った。三人は手を振つてからその場を後にした。

*

午後10時半。アパートのドアが開いた。

「お帰りーー」

フィリアの元気な声を聞いてセツエイは微笑んだ。

「ああ

セツエイは何だか疲れていた。よほど遠くまで行つたらしく。

「ご飯あるよ

フィリアが丸テーブルを指差した。

「…………

セツエイは無言で座り食事を開始。

「ありがとね」

フイリアが笑顔を浮かべる。

「構わない」

セツエイは短く答えた。この笑顔が見れるなら構わなかつた。フイリアは楽しそうにセツエイが食べるのを見ていた。

「なんだか……気になるな」

セツエイは独語する。フイリアは気にしてした様子もなく笑顔でセツエイを見つめていた。

食べ終えて時計を見ると午後11時。もう寝る時間だ。翌日は休みのが唯一の救いである。

「風呂入るか……」

つぶやいて立ち上がる。

「ねえ……セツエイ……お願いがあるんだ……」

フイリアが小声でつぶやく。いつも元気なフイリアにしては珍しい。セツエイは首を傾げた。

「なんだ?」

とりあえず聞いてみる。その瞬間にフイリアが淡い黄色の就寝着を脱いでいく。

「ちょっ……お前は何をしてるんだ!」

セツエイが叫ぶ。

淡いピンクの下着姿になつたフイリア。滑らかな白い肌を見ただけで眩暈がした。刹那、閃光が部屋を満たす。現れたのはフイリアの羽。脱いだのは羽を出すためだつたらしい。だが、羽を出して何をするのか。

「羽を……洗うのを手伝つてほしいんだ。一人では……限界があつて」

フイリアが顔を赤らめる。

「リンでは駄目なのか?」

セツエイが一步後ずさる。一緒に風呂に入るという行為に抵抗を

感じる。ただ羽を洗うだけなのだが。

「いいんだけど……羽を洗つてもらつためだけに来てもらひのは…

…ちょっと」

「フィリアが苦笑いを浮かべた。確かにそうだね。どんな周期で洗うのかは知らないが。

「さ……さつさと済ませるぞ」

セツエイは顔を真っ赤にして風呂場に向かつ。やましい事を考えなければいいだけだ。

「うん！」

フィリアが笑顔を取り戻して続く。セツエイはフィリアの成長した羽を丁寧に洗い、お礼に自身は背中を洗つてもらつたのであつた。

天使と癒しの羽 3

天使と癒しの羽

3

「セツエイーー朝だよーー」

声と共に体を揺さぶられる。セツエイは慌てて瞳を開く。
「起きた？」

目の前には満面の笑顔を向けるフィリア。すでに起きていたらしく淡い黄色の就寝着の上にエプロンをつけていた。

「何時だ？」

セツエイは笑顔のフィリアに問う。時間次第ではすぐにでも出なければいけない。頬に嫌な汗が流れる。

「6時半かな？」

フィリアが小首を傾げた。

正確な時間ではなさそうだが、これから準備をしても十分に間に合つ時間だ。安堵の溜息をついて、体を覆っている毛布を退けた。フィリアに布団を渡しているので自分はずつと毛布一枚。毎晩、布団に一緒に入るうと誘われるが断つている。それ以降は決まったパターン。フィリアがセツエイの毛布に潜り込んでくるのだ。気づいているが止める事はしない。フィリアの幸せそうな寝顔を見たら注意できないのだ。

「そうか……いや……待てよ」

セツエイが首を傾げる。フィリアも首を傾げる。

確かに本日は土曜日で高校は休みだ。枕元に置いてある携帯を開く。確かに土曜日だった。

「ゆっくりしてると遅刻するよー」

フィリアがセツエイの腕を引っ張る。

「今日は休みだ」

セツエイがフィリアの頭を撫でる。

「ふえ？ 休み？」

フィリアが大きな緑色の瞳を大きく見開く。

「五日通つたら……一日間休みなんだ」

セツエイが柔らかい髪を撫でながら説明する。

「お休みか。ならどうしよう？」

フィリアが台所に置かれているお弁当を見つめる。すぐに残念そうに肩を落とした。

「今から食べよう」

セツエイが立ち上がる。今まで落ち込んでいたフィリアの表情がいつもの元気な微笑に変わる。

「うん！」

フィリアが丸テーブルを部屋の中央に移動。一人は朝からお弁当を食べ始めた。

お弁当を食べ終えそれぞれが私服に着替える。セツエイは白いワイシャツにジーンズ、フィリアは肌に合つた薄手の白いセーターに深緑のロングスカートである。フィリアの服はセツエイが用意したものだ。元気なフィリアにはもう少し動きやすそうな服が似合う気もしたが、優しいフィリアにはセーターやロングスカートが似合う気がしたのだ。機会があればリン辺りからアドバイスがほしいと思っているセツエイである。

「学校ないなら活動できないかな？」

フィリアが頬に手を当てて思考。少し残念そうだ。

「散歩でもしてみるか？」

セツエイが提案する。何か困っている人がいるかもしれない。

「それもいいねー」

フィリアが嬉しそうにつぶやく。もう少しゆっくりとした時間を過ごせると思つたが、丸テーブルに置いてあつた携帯が突如振動す

る。

「……俺に電話？」

セツエイが首を傾げる。こんな朝早くから携帯に連絡が来る事など今までの経験ではない。むしろ一日連絡がない事の方が多い。この男ほど携帯電話が不要な人物はいないだろう。携帯を開くと電話ではなくてメールだった。内容をとりあえず読んでみる。

「…………ふむ」

セツエイは顎に手を置いて思考。

「なになに」

フィリアが携帯を覗き込む。

「休みの朝早くからすみません。クラスメイトから相談を受けていて……力を貸して下さい」

メールにはそう書いてあった。送ってきたのはリンだ。

「リンからだ。行こう」

フィリアがすぐに立ち上がり、ドアに向かっていく。

「待て」

セツエイは静止の声を上げると同時に携帯のメール作成ボタンを押す。フィリアが振り向くと、セツエイが何やら両手で携帯を握り、ボタンを押していた。

「…………」

特にする事がないフィリアがセツエイの様子を見つめる。

一分の時間を使いようやくセツエイがメールを送信。内容は「どこに集合するんだ?」という短い内容。時間がかかったのは文章を考えると、ボタンを押すのが遅いからだ。まるで老人に携帯を渡したかのような戸惑いようである。

「ふう…………慣れんな」

セツエイは一仕事を終えたような顔をしていた。

つぶやいた瞬間に携帯が再度振動。送信からほんの数秒の間であった。セツエイは驚きで目を見開く。これが現役女子高生の早さかと内心でつぶやく。

「むーーーー」

「フィリアは状況が分からぬのが不満なのか柔らかな頬を膨らませる。

「どうやらここに来るやつだな」

セツエイが携帯を閉じながらつぶやく。フィリアの膨らんでいた頬はすぐに元に戻り瞳を輝かせる。

「リンが来るのー」

フィリアが天使の笑顔を浮かべて笑う。フィリアの表情は見ていて飽きない。一言でコロコロ変わる。ほとんど無表情であるセツエイとはまるで違う。この違いが時に兄妹である事を忘れさせてしまふ。セツエイはフィリアにはばれないようその感情を心の奥に押し込んだ。

「楽しみだなー」

フィリアが丸テーブルの前に座り微笑んでいる。

「さて……本日も頑張るか」

セツエイは微笑んでフィリアの嬉しそうな顔を見つめるのだった。

*

リンは整備された無機質な道を歩いていた。碁盤目状になつてるのは知らない所に行くには便利である。

「…………緊張するな」

リンは独語する。言葉通りリンの表情はどうか固い。友達の家に上がった経験が少なく戸惑っているのである。そして、男性の家に上るのは初めて。フィリアの家でもあるのだが緊張するなど言つほうが無理である。

「おかしくないよね？」

リンが自らの服装を確認する。Tシャツの上に茶色の革ジャケットを羽織り、下はカーゴパンツ。頭にはカーキ色の帽子を被つてい。露出度はほぼゼロ。女子子らしさも全くなし。だがリンはこう

いう男性らしい服が好きだつた。個性的と言えば聞こえはいい。だが中には奇異の目で見てくる人間もいる。すれ違う人の中にはリンを見て首を傾げる者もいるくらいである。その度に溜息が出てしまう。

リンは一人の顔を思い浮かべる。次の瞬間には微笑んでいた。あの二人がこんな些細な事でリンに不審な瞳を向ける訳がない。短い付き合いだがリンは一人を信頼していた。だから家に行くのは緊張するが嬉しくもある。これだけ温かい気持ちにさせてくれる一人。先ほどとは違ひ二人の家に向かうリンの足は弾んだ。

リンの指は震えていた。現在いるのはセツエイとフイリアが住んでいるであろうアパートの205号室だ。目の前に来た瞬間にまた緊張するのだから人間とは不思議なものである。あの弾んだ気持ちのまま押せれたらどれだけよかつたか。

「だ……大丈夫よ。昨日ど……どれだけ押した事か」

リンはつぶやいてインター ホンに指を伸ばす。

「ええい……ままで！」

謎の言葉を吐いてリンがインター ホンを鳴らす。ついに押してしまった。待つこと数秒。ドアが開く。出て来たのは私服姿のフイリアだつた。セーターにロングスカート。

「か……可愛い……」

リンは自然とつぶやいていた。女の子として完全に敗北したような気がした。だがこの程度で揺らぐリンではない。好きな事はとことんまで貫くのがリンである。この服にも魅力はあると心の中で力説する。支持者がどれだけいるかは知らないが。

「ようこそーーー

フイリアがリンを抱きしめる。お決まりの挨拶だ。

「相変わらずね」

リンが微笑んで受け止める。

「ようこそ」

フィリアの後ろに立つたのはセツエイ。ワイシャツ姿がやけに大人っぽい。大学生を越えて、もはや社会人に見えるのはリンの気のせいだろうか。

「おはようございます」

リンは挨拶をした。

「おはよう

セツエイは微笑んで挨拶。リンの服装を見ても奇異の目を向けなかつた。

「あの……」

それでもリンは気になつた。一人が首を傾げる。

「おかしくないですか？」

リンが自らを指差す。

「リン、かつこいいよ！」

フィリアがリンを解放して全身を見てから述べる。

「それがリンらしさだな」

セツエイは微笑み一つ頷いた。

「ありがとう」

リンは微笑んだ。やはりこの二人は温かい。潤む瞳を帽子で隠したリンはフィリアに案内されて部屋に上がつた。

*

丸テーブルに置かれたのは三人分の温かい緑茶。

「…………」

リンは無言で出された緑茶を飲む。セツエイも緑茶を一口飲み、それから口を開いた。

「何があつたのか？」

セツエイはすぐに本題に入つた。

「そういえば何か相談があるんだよね

フィリアも思い出したようだ。

「はい……恋愛相談があるんです」

リンは顔を落としてつぶやく。真っ赤になつた頬を見られたくないのだ。

「……俺に恋愛相談?」

セツエイは危うく緑茶の湯飲みを落としそうになつた。セツエイは異性と付き合つた事はない。進んでその話題に触れる事もないのでは力になれるのか疑問に思つ。

「リン、好きな人がいるの!」

フィリアが瞳を輝かせる。天使でも恋の話は興味があるらしい。「わ……私の話ではないよ」

リンが頬をさらに真つ赤に染める。

「えーいないの。いそなに」

フィリアが頬を膨らませる。

「い……いないよー?」

リンは何だか視線が泳いでいる。だが、一瞬だけチラリとセツエイに視線を向ける。リンの心臓がその一瞬だけ早くなる。その鼓動を抑えようとした時にセツエイが口を開く。

「そういえばクラスメイトから相談を受けたのだったな」

視線に気づいた様子もないセツエイがメールを思い出す。

「はい。どうやら好きな人がいるみたいで……それで……」

リンがつぶやく。

「好きな人か……素直に気持ちを伝えればいいのではないか?」

セツエイが顎に手を置いてつぶやく。

「そうだよ。ちゃんと伝えればいいよ」

フィリアも拳を握つて断言。リンはこの二人は真っ直ぐ過ぎると思つ。リンならば上手く伝えられる自信はない。言える度胸も今はない。

「無理では……ないかな。もしも……だよ。伝えて……今の関係が壊れたら嫌だよ」

リンは顔を落とした。なぜか寒気がする。他人の相談がなぜか自

分の事のように思える。」この気持ちはいつたい何なのだろうか。複雑な気持ちを抑えて瞳を上げる。セツエイの瞳とリンの瞳が重なる。

「だが……伝えなければ後悔する」

セツエイは迷わずつぶやいた。 フィリアも頷く。

「…………」

リンはすぐには言葉を返せなかつた。

「しかし……相手も分からずに考えていても仕方ないか。情報を集めよう」

セツエイが立ち上がる。

「おー」

フィリアも立ち上がる。

「すごい……行動力。でも……相手を知つたら驚くだろうな」

リンは苦笑いを浮かべて一人の後に続いた。

*

休日の学校。見た目は全く同じなのだが、どこか異質な雰囲気がする。耳を澄ませば楽器の音、発声練習のはつきりした声、運動部の掛け声など多種多様な音で満ちている。

「部活か……」

セツエイが名残惜しそうにつぶやく。セツエイは一人暮らしをしているために部活はやらなかつた。最高学年となり卒業が迫るセツエイは少しだけ後悔している。忙しくても何か思い出を作つておけばよかつた気がするのだ。

「…………今…………部活してますよ」

セツエイの左隣を歩くリンが微笑む。

「セツエイは癒し愛好会のメンバーだよ」

右隣を歩くフィリアは頬を膨らませる。

「…………そうだったな」

セツエイは一人を見てから微笑んだ。 フィリアのために作った愛

好会。だが今ではそれを楽しんでいる自分がいる。セツエイの心に温かい気持ちがあふれてくる。「この温かさを今日も誰かに伝えられればいいと思う。

ほじなく歩くとリンが校舎を指差す。

「目的地はあそこです」

リンの言葉を聞いてセツエイは首を傾げる。

目標がアバウトすぎるのだ。仕方なく一人はリンの後に続く。玄関に入り田の前の丁字路を右に曲がる。そちらは職員室、またはクラブハウスに行く道、そしてあまり用がない保健室があるくらいだ。

「…………」

セツエイは退屈なのでどこに向かっているか思考する。

「ふふ……」

前を進むリンがうつすらと微笑んだ。あまりにも真剣に考へているセツエイがおかしいのだ。

「リン、どうして笑っているの？」

フィリアが首を傾げる。

「秘密」

リンは微笑んで返す。

「むー」

呻いて頬を膨らませるフィリア。その様子に再度リンが微笑む。リンの弾んだ足が向かったのある一室。

「…………なるほど…………」

セツエイはその一室を見て理解したらしい。

「なになに」

恋愛話に興味があるフィリアは先が気になるご様子。

「養護教諭と……女子高生の恋愛か。触れてはいけない気がするが」

セツエイは溜息をついた。応援していいかどうか判断に迷つ。

「ね……年齢なんて関係ありません！」

リンは振り向いてなぜか叫ぶ。

「そうだよ。癒し爱好会……今回もフルパワーで活動だよ

フイリアが拳を掲げる。

「おー」

リンがセツエイの右手を掴んで一緒に腕を上げる。

「まあ……いいか」

セツエイはとりあえず協力するを事にした。様子を見て危険だと思つたら止める人間も必要だうと、心の中でつぶやいて。

*

リンが養護教諭に恋愛中といつクラスメイトを携帯で呼び出している間に、セツエイとフイリアは移動。校舎の外に出て、人工で作られた木の陰から保健室の窓を覗く。

「あれだね」

フイリアが目を細める。

そこには一人の黒髪の男性がいた。年齢は20代中頃。190センチはある長身に、ほつそりとした体格。眼鏡の奥には養護教諭らしい優しそうな瞳が見える。

「ああ。温和で優しい教師だと聞いている。女子生徒にはかなりの人気だな」

セツエイが情報を補足。

「……笑っているセツエイに少し似てるね」

フイリアが微笑む。

「俺はあんなに優しくない」

セツエイは溜息をついて返す。

少々長居しそぎたのか養護教諭が視線に気づいて温和な笑顔を向ける。慌てて二人はその場を逃げるように行く。逃げる理由などないのだが、コソコソと見ていたのが後ろめたかつた。

息を切らして玄関まで走つた一人が呼吸を整える。

「どうだつた?」

リンがフィリアに問う。

「優しそうな人だつた」

フィリアが感想を述べる。10人いれば8人くらいはそう述べるような温和で優しい雰囲気が養護教諭からは感じられた。

「リン……これが相談に乗つてくれる人？」

リンの後ろにはウェーブがかかった茶色の髪を腰まで伸ばした女性がいる。

「あ、ルーメアだ。おはようー」

フィリアがルーメアと呼んだ少女に抱きつく。

「ちょ……フィリア。あなたは……もう」

抱きつかれたルーメアは困っているようだ。だが、表情は優しい。失念していくがリンのクラスメイトであればフィリアのクラスメイトでもある訳だ。

「なあ……フィリアは誰にでもああなのかな？」

セツエイが確認。

「うん……どんな人にも抱きつくよ」

リンは呆れながらつぶやく。ルーメアはようやくフィリアからの抱擁から逃れて一息ついた。

「……コホン。ルーメア・グレイスです。あなたが兄のセツエイ先輩ですね。張り紙は見ました。校内では噂になつてますよ。先輩はよほど有名なんですね」

ルーメアがセツエイに微笑む。

「俺なんて対した事はない。この愛好会は……フィリアがいないと成り立たないからな」

セツエイがフィリアの頭を撫でる。

「えへへ」

フィリアが嬉しそうに頬を緩める。

「そうですか……。では早速んですけど……事情は知っていますよね？」

ルーメアが頬を朱色に染める。

「好意を抱いたのは……養護教諭のノルア先生。相手が教師であるため、なかなか行動できないんだな？」

セツエイが確認する。ルーメアは顔を真っ赤にしてカクカクと機械のように頷く。

「どうして惹かれたの？」

フイリアがルーメアの手を温かく包む。ルーメアが三人を順番に見つめて、それから口を開いた。

「……私はテニス部に所属しているのですが……あまり上手くなくて……よく怪我をするんです」

ルーメアがゆっくりと語り出す。皆は黙つて聞く。

「先生は何度も来る私に嫌な顔をせずに対応してくれました」

ルーメアは嬉しそうに語る。だが次の瞬間には表情が曇る。そのわずかな変化をセツエイは見逃さない。

「……部に馴染めていないのか」

セツエイは予想を口にする。ルーメアが目を見開いた。

「馴染めていない？ ルーメアが？」

リンも目を見開く。あまり人付き合いが得意ではないリンと比べればルーメアは上手くクラスに馴染んでいる。そのルーメアが部に馴染んでいないとは意外だった。

「……すごいですね。そうです。私は全く部に馴染めていません。ただ足を引っ張るだけ……最初は優しく教えてくれた先輩もだんだん私に球拾いをさせるだけになつて……悔しくて……」

ルーメアの頬に涙が伝う。

「……傷だけでなく、心も癒してくれたんだね」
フイリアが優しく声をかける。ルーメアは頷いた。

「……」

セツエイは顎に手を置いて思考。この案件はどうやら教師とくつつけて終わりではないらしい。それよりも部に彼女を馴染ませる必要がある。

「大丈夫だよ」

フィリアがルーメアの涙を薄い黄色のハンカチで拭う。リンはルーメアの背中を優しく撫でる。

「事情は分かつた。少し時間が欲しい」

セツエイはそれだけを言い皆に背を向ける。

「セツエイ？」

フィリアが首を傾げる。リンは口を開いたが、すぐに閉じる。

「どうすればいいかな？」

ルーメアが一人に問う。

「そんなの簡単だよー」

フィリアがルーメアの手を取つた。ルーメアは何か嫌な予感がした。

「そうだね。それが一番早い」

リンも乗り気だ。

「ちょ……嘘。本当に行くの！」

フィリアに腕を引っ張られ、リンに背中を押されるルーメア。

「待つて——！」

ルーメアの叫びが空に響いた。

*

掛け声とボールが地面を跳ねる音が響く。目の前にはジャージ姿でラケットを振るう生徒。セツエイはクラブハウスの前にあるテニスコートに来ていた。コートは一つあり、手前が女子部員が使うコートで、奥が男子部員が使用するコートだ。

「……やはり練習はしていたか」

テニスコートを見てセツエイは溜息をついた。

本日は土曜日。テニス部であるルーメアが練習をしていないのが不思議に思ったのだ。実際に来てみれば一年生から三年までの女子部員が練習をしていた。ルーメアはついに球拾いまでやらせてもらえないらしい。それがルーメア自身の意思で練習に参加していない

のかもしない。

まずは見知った顔を探す。だが、女子生徒で気楽に話しかけられる部員はすぐには見つからない。リンを連れて来たかつたがフイリアだけにするのは不安だった。

一度溜息をついてから隣の男子部員の「一トへ。

「……？」

セツエイは首を傾げる。なぜか見知った男がジャージ姿で試合形式の練習に混じっている。今は試合が終わったのかスポーツタオルで汗を拭いていた。

「マックス」

セツエイが声をかける。マックスは気がついてこちらに歩を進め
る。

「なんだ、セツエイか。どした？」

「なぜお前がここに？ テニス部ではないよな？」
だ。

「俺は流れる用心棒なのさ」

セツエイの問いに、微笑むマックス。

「まあどうでもいいか。練習相手に引っ張られた程度だろう」

セツエイは興味が失せて話題を強制終了。

「だんだん扱いが酷くなつてないか？」

マックスがうなだれる。

「すまんな。すぐに聞きたい事がある」

セツエイは真顔で問う。先ほどまで無表情だったので変化はない。だが、この男をよく知っているマックスにはすぐに分かった。これは何がある。

「なんだ？」

マックスも表情を引き締める。

「女子のテニス部の事だが……ルーメアという一年生が酷い扱いを受けていないか？」

セツエイが問う。

「名前は知らないけれど……ずっと球拾いをさせられている女の子がいたな。俺も気になつてたんだ。今日はいらないな」

マックスがテニスコートを眺める。

「ふむ。理由……分かるか？」

セツエイが女子部員のテニスコートを眺める。

「見てわかんない？」

マックスがまずは男子部員のテニスコートを指差す。ちょうど部員同士で試合をしていた。だがラリーがなかなか続かない。一方が打った球に追いついていない。荒い呼吸を整えているのが分かる。もう一方は涼しい顔をしていた。ただ淡々と試合形式の練習をこなしているというイメージである。

「レベル差が激しいな」

セツエイがつぶやく。

「ああ。確かにレベルが高い部員もいる。でも、素人レベルの部員が多いのは確かだよ。それでもあまりギスギスした感じはしないよ。なんだか趣味でやってますみたいな集まりだ」

マックスがつぶやいた。セツエイが見た所その言葉は当てはまるような気がする。

「んで……次はあっち」

マックスは女子部員が使うテニスコートを指差す。

「それくらい追いつきなさい！」

おそらく一年生の部員が一年生の部員に叫んでいる。

「ごめんなさい」

一年生はもはや泣きそうである。半泣きの部員に容赦なくサーブを浴びせる。ボールが直撃した部分は痛々しく赤くなっている。

「……まだあつたんだな」

セツエイはつぶやいた。

「ああ……これがスポーツ魂ってやつだよ、セツエイ」

マックスが溜息をついた。

「予想以上に指導が厳しいな。そして……全体的にレベルが高い」セツエイが練習を眺めながらつぶやいた。

「そう言ひ」と。あの中に素人でざんくさいのが入つたら邪魔になる。でも……あれを見てみる」

マックスがとある生徒を指差す。セツエイが視線で追いつ。コートに立つてるのは眼鏡をかけたか弱そうな生徒。運動はあまり得意ではないのか上級生のサーブを取れていなし。

「一回くらい取りなさい！」

上級生が叫ぶ。

「はい！」

か弱そうな生徒は涙を浮かべて叫ぶ。

セツエイは首を傾げる。何が違うのだ。

「まあ見てろよ」

マックスがニヤリと笑う。どうやらセツエイが分からぬ事が分かつてているのが嬉しいらしい。

その後も上級生の強烈なサーブを取れない女子部員。

「あんたはもういい……球拾いをしてなさい」

上級生は溜息をついた。

「……お願いします！ もう少しだけ」

女子部員が頭を下げる。それを見て上級生が溜息をついてからラケットを構える。

「……」

セツエイが顎に手を置いた。

「別にあの子だけに厳しい訳ではないし……諦めない人間には優しいんだよ。練習は鬼みたいだがな」

マックスが苦笑いを浮かべてつぶやく。

「なるほど……ただ前を向かせればいいだけか」

セツエイは短くつぶやいて去つて行く。向かうのは女子部員のコート。

「頑張れよー」

マックスがセツエイの背に言葉をかける。セツエイが軽く片手を上げて応えた。

セツエイはコートの隅を歩きながら三年生を探す。

「あれ……セツエイ？」

突然、左側から声をかけられた。振り向くとクラスメイトがいた。セツエイに届きそうなくらいの長身にスラリとした体格。元気そうな笑顔と茶色のショートヘアからはボーアッシュな感じが漂っている。

「…………確か名前は……」

セツエイがこめかみに手を置く。全く思い出せない。

「…………クーリアだ！」

クーリアと名乗ったクラスメイトが、セツエイの頭部をラケットで殴打。

「…………この一撃は甘んじて受けよつ…………すまない。名前を覚えるのは苦手なんだ」

痛む頭部をセツエイが擦る。

「まあいいけど。んで…………なんで男がこの神聖な女子部員のコートにいるの。返答によつては…………いろいろ恩はあるけど捕まえるよ」
クーリアがラケットを向ける。

「ちょうどいい。少し頼みたい事がある」
セツエイはクーリアに向き直る。

「はあ？」

クーリアは訳が分からないという顔をしていたが話は聞いてくれるようだった。

*

四角いテーブルには温かい紅茶が置かれていた。それぞれソファに座っている四人はカップを取り最初の一口を飲む。手前にリ

ンとルーメア、奥にフイリアとノルアが座っている。

「いい香りがしますね」

リンが微笑む。

「それはよかつた。心が落ち着くんですよ」

養護教諭であるノルアがリンに微笑む。柔軟で心を洗うような笑顔だった。この笑顔はどこかで見た事があるような気がする。

「皆が元気になるね」

フイリアも笑う。その笑顔を見てリンは納得した。フイリアとノルアの笑顔は似ている。心を温かくし、優しく包み込んでくれる笑顔だ。

リンがチラリと右を見るとルーメアが顔を真っ赤にしてノルアの笑顔を見ていた。この笑顔にやられたらしい。

「ところで……ルーメアさん」

ノルアが紅茶のカップを置いて、ルーメアの名を呼んだ。

「は……はい！」

ルーメアは背筋を伸ばして返事を返す。

「緊張しなくていいよ。ただ……今日は練習ではないの？」

ノルアの表情が曇る。外からは少なからず部活動にいそしむ者達の掛け声が聞こえる。

「行つても……また球拾いですか」

ルーメアが顔を落とす。リンはルーメアの様子を見て顔を落とす。そんな時にリンの携帯が振動。しつぞりとポケットから取り出して開く。

(……ルーメアが前向きになれば部活は大丈夫そうだ)

リンがメールの内容を心の中でつぶやいた。訳が分からないが信じるしかないだろう。

「ちゃんと話せば練習させてもらえると思うんだけどね」

ノルアが微笑む。ルーメアは顔を落とした。ただ球を拾い、上級生の顔色を窺うのはもう嫌だ。

「部活の方は大丈夫だよ」

フィリアが胸の前で拳を握る。

「どうして？」

ルーメアが顔を上げる。頬にはうつすらと涙が伝づ。

「セツエイ先輩が向かつたからね」

リンが微笑む。

自信満々の二人に目の前で優しく微笑むノルア。自然とルーメアの心に力が沸いてくるのを感じた。理由は分からぬ。ただここにいてはいけない気がする。

「ここにいてはいけませんよね」

ルーメアは膝の上で拳を握つてつぶやく。

「……怪我をしたり、練習で落ち込んだら来ればいいよ。でも、ここは長居をする場所ではないかな。皆が元気なら保健室も養護教諭もいらないんだよ」

ノルアが微笑んで語る。

「そんな……元気でも……私は……」

ルーメアはそこまで言つて口を閉ざす。

「何があるなら来てもいいさ。ここはいつでも開けてるからね」

ノルアが微笑む。

「もう一度……行つてみたらどうかな？」

リンが携帯を握つてルーメアに言葉を掛ける。前を向けば大丈夫。その言葉だけを信じてルーメアの背を押す。

「……そうだね」

ルーメアは弱々しく笑う。

「元気に笑つて……思つた事を口にすれば分かつてくれるよ
フィリアがルーメアの頬に触れる。ルーメアとフィリアの瞳が重なる。フィリアの力がルーメアに流れてくるような気がする。

「行かないと……」

ルーメアが立ち上がる。

「うん。先生とはまたゆっくりティー……むぐう……」

フィリアの口を慌ててリンが塞ぐ。頬むからそれ以上は言わない

でほしい。

「いいよ……今の私は逃げるだけ……だから。相応しくない」
ルーメアはそれだけをつぶやいて背を向ける。ドアを開けてから一度頭を下げて外に出た。それからは廊下を走る音だけが聞こえた。
「リンさんだつたかな。離してあげたほうがいいよ」

ノルアが隣で口を押さえられているフィリアを指差す。見る見る顔が青ざめている。

「ご……ごめん」

リンが慌てて押さえていた口を解放。フィリアは酸素をその小さな体に一気に取り込んだ。

「死ぬかと思った」

フィリアは肩を落とす。

「ふふ……君達は面白いね」

ノルアが微笑む。

「そ……そうですかね」

リンは苦笑いを浮かべるだけで精一杯だった。だがリンが油断をしている内に目の前にいる天然天使がまたもとんでもない事を質問。「ノルア先生はルーメアの事をどう思つてるの？」

瞳を輝かせて問うフィリア。

「フィリアさんはストレートだな」

ノルアが笑う。

「むー。笑うシーンではないよ」

フィリアが頬を膨らませる。どうやら期待した答えではないらしい。

「実際はどうなんですか？」

リンが問う。もうここまで聞いてしまったのだ。さすがに質問の意図には気づいているだろう。

「うーん。一応、教師だからね」

ノルアが苦笑する。全うな答えである。

「でも……でも、ルーメアは」

フイリアが拳を握つて言葉をぶつける。

「知つているよ。むやみに優しくしたのは間違いだつた。善意のつもりだつたんだけど……僕は彼女の足を止めてしまつただけなのかもしれない」

ノルアが顔を落とす。

ルーメアはここがあまりにも心地いいので、ついついこの場に甘えてしまつてゐる。それが分かるのが辛いのだらう。

「先生が悪い訳ではないと思います」

リンが何とかフォローを入れる。

「……」

ノルアは無言で考え込む。

「やはり……ちゃんと話さないと駄目だよ」

フイリアは立ち上がりノルアに手を差し出す。

「……ふふ、どちらが教師か分からぬ。でも、今回は様子を見て終わりにするよ。これ以上関わつてはルーメアさんを止めてしまうだけだから」

ノルアは微笑んで手を取る。フイリアはしつかりと手を握り引っ張る。

「……それが先生の答えなら仕方ないね。それなら行くよー」

元気な声と共にフイリアはテニスコートへ向けて駆け出した。

*

事情を聞いたクーリアはルーメアが来るのを練習しながら待つていた。セツエイは「コートの隅にあるベンチで座り様子を窺つらしい。

「ここまでするか……？」

クーリアはサーブを打ちながら独語。

セツエイ達が癒し愛好会を作つたのは知つてゐる。あなたに癒しを届けます、なんて何かの冗談かと思っていた。だが彼らは本気らしい。

「ここまでしないと癒せないと癒せないのかな」

次のサーブを打ちながら再度、独語。

クーリアが視線を上げると見慣れた茶色髪の生徒がいた。

「ラケットを持たないで何の用」

クーリアは冷たく言い放つ。セツエイに頼まれていなかつたら無視する所である。部活には遅刻、そしてラケットを持つていない事に苛立ちを覚えた。いつたい何のために来たのか。

「……今日は遅れました……球拾いを……きやあ！」

ルーメアは最後まで言葉を言う事ができなかつた。ルーメアの足にサーブが直撃したのだ。周りの生徒が一人に注目する。

「ざっけんな」

クーリアは我慢できなかつた。こういう嘘を言う奴は嫌いなのだ。ラケットを投げ捨ててルーメアの胸倉を掴む。ルーメアは震えていたが何とかクーリアの瞳を見つめた。

「ふざけて……いません。私は練習をしたい……球拾いをして練習できるなら……する！」

ルーメアは半分自棄になつて叫んだ。後半は敬語ではなくて素の言葉に戻つていた。それだけ余裕がないのだろう。

「ようやく本音を言つたか。練習したいなら……練習したいとはつきりいいな。どれだけきつい事を言われても諦めないので。そういう部員はどれだけ下手くそでも見捨てない。ただやる気がない奴はひとつと球拾いをさせる。分かった？」

クーリアは微笑んでからルーメアを解放する。呆気に取られて立ち尽くすルーメア。

「……ほら」

声に反応して振り向くとラケットを持ったセツエイがいた。

「……ありがとうございます」

ルーメアはラケットを受け取る。

「今日は今までの分を取り返すよ！」

クーリアがニヤリと笑う。なぜか心底楽しそうに見えるのは気の

せいだらうか。練習を開始する一人を見てからセツエイは背を向けた。もうやる事はないだらうから。

*

フィリアに手を引かれてノルアはテニスコートまで来た。掛け声と、ボールを打つ音が耳に届く。

「……ちゃんと練習してる」

ノルアが微笑む。

視線を追うとコートに立っているルーメアがいた。まだ打ち返す事すら上手くできない。時折、バウンドしたボールがルーメアに当たる事もある。苦しげな表情を浮かべてはいるが、ルーメアは真っ直ぐに前を向いていた。そして、ラケットがボールに当たるだけで表情をほころばせている。

「解決かな」

リンが微笑む。

「最後の……仕上げ！」

フィリアがノルアの背に立ち、両手でノルアを押した。

「おつと……！」

ノルアはバランスを崩しながら前に数歩歩んだ。ルーメアがこちらに気づいて一度だけ微笑む。だが、すぐに前を向いた。ただ前を向いて練習に励むルーメアは輝いて見えた。今までの自信がないルーメアはもういない。ノルアはそんなルーメアを温かく見つめる。

「……今は行つてはいけない」

ノルアは背を向ける。もうルーメアは一人で歩いていける。助けなんていらない。

「そんないー」

フィリアが残念そうにつぶやく。

「これでいい……」

セツエイがテニスコートを出て、こちらに向かって歩いてくる。

表情を見れば分かる。役目は終わったという顔をしている。

「そうだね」

ノルアが振り向いて微笑んだ。

「そして……これが最初の一歩だ。前向きになつた彼女のアタックは強烈そうだな」

セツエイも微笑んでつぶやく。

「そうですね。これからが楽しみです」

リンが一人を見て楽しそうにつぶやく。

「うん?」

フィリアだけはよく分からないらしく首を傾げるのだった。

*

三人は高校を後にして、セツエイのアパートを目指して歩いている。

「本当にいいんですか……?」

リンが確認をする。

「ああ。一応ルーメアを前向きにする事ができたんだ。成功を祝つ
くらいはいいだろ?」

セツエイがつぶやく。

「そうだねー。何か温かい物を食べよー」

フィリアが提案。

「なら……鍋なんてどうかな?」

リンが提案。

「いいね。作るよー」

無邪気なフィリアの声を聞いて、セツエイとリンは微笑むのだった。

天使と癒しの羽

4

「リン、喜ぶかな」

台所に立っているフィリアは微笑んでつぶやく。現在は午前7時。振り向くとリンとセツエイはまだ眠っている。出来れば一人が起きる前に朝ご飯を作つておきたい。

結局、リンは一日泊まる事にした。お鍋を食べ、フィリアの羽を洗つた時にはすでに午後10時を越えていたからだ。最初は緊張していたが、さすがに馴れたようで今は幸せそうな笑顔を浮かべて眠つている。

「頑張らないと」

フィリアが胸の前で拳を握る。

朝食のメニューはパン、スクランブルエッグとハム、そしてサラダだ。リンの好みがよく分からないので出来るだけシンプルなメニューを選んだ。今は卵が嫌いでなければいいなと思う、フィリアであつた。

フィリアは意識を手元に集中させる。現在、手に握るのは小振りな四角いフライパン。片手で卵を割り中に入れる。それと同時に中火に変える。周りが固まり出したのを見て素早くかき混ぜる。

「これくらいかな？」

フィリアがぽつりとつぶやく。卵が少し生な感じがする。だがあまりやりすぎると余熱で、さらに固まってしまう。成果は上々と言う所だろう。ご機嫌なフィリアが次のメニューに入つていった。

リンはうつすらと瞳を開ける。

「……」

無言で覆いかぶさつている布団を除けて、ゆっくりと半身を起す。チラリと右を向くとセツエイが毛布に包まって眠っている。

「……一泊しちゃつた」

リンは独語した瞬間に顔が真っ赤になつた。いつたい何を考えているのだろうか。ただ友達の家に泊まつただけの話だ。深い意味はない。だが浮かんでくる思考は止まらない。

「……は……早く起きよう。うん、そうしよう」

リンは早鐘のようになる心臓の音を無視して起き上がる。

「朝か?」

隣からセツエイの声がする。どうやら起きたらしい。

「え……えっと、7時くらいだと思います」

リンがとりあえず言葉を返す。それを聞いてセツエイが体を起こす。

「よく眠れたか?」

セツエイが微笑んで問う。リンが無言で頷いた。何を言つていいのか分からなかつた。口を開いた瞬間に予想もしていない事を言いそうな恐怖もある。

「それはよかつた」

セツエイは立ち上がり、一度リンの頭を撫でる。大きな手だと思つた。そして、優しい。

「……」

リンは自然と頬が緩んでしまつた。両手で頬を叩いて意識を強制的に引き戻す。

「二人とも起きたんだ。出来てるよー」

ふとフィリアの明るい声が耳に届く。

「ありがとう」

リンがつぶやいて立ち上がる。いつまでもこのまま呆けている訳にはいかない。立ち上がり布団を片付けていく。ほどなくして三人は丸テーブルを囲んで朝食を取つた。

*

後ろに誰かが立つ気配がする。天使長はゆっくりと瞳を開けた。
「まもなくドーム型都市6と8が接近します」

後ろに立つた天使が報告する。

「うむ。それはよい」

天使長は低い声でつぶやく。問題はその後だ。
「やはり……人類はこんな状況でも争いますか？」

天使は問う。

「そうだろうな。それが人間だ」

天使長は溜息をつく。

「では……我らも行動を……」

天使の言葉に力が入る。天使長がゆっくりと振り向く。

「それは……人間が愚かな行動をした時だ」

「……分かりました」

天使長の言葉を聞いて、天使は空へと飛翔する。

「……」

天使長はゆっくりと瞳を閉じる。見てているのは慈愛の天使の娘。
そして、彼女を支える一人の人間。

「全ての者があのような者であるならば……慈愛の天使の言葉も聞く価値はあるのだがな」

天使長は重い溜息をついた。

*

リンとフィリアは一人揃つて無機質な道を進む。

「ごめんね……送つてもらつて」

リンはまだ遠慮している。水くらいにも程がある。だが、この控え目な所がリンらしくもある。

「一緒に布団で寝つた仲だよ。遠慮しないで」

「フイリアがリンに抱きつく。自然と身を寄せ合つて一つの布団で眠つた事を思い出す。

「……そうだね」

リンは微笑んでフイリアの頭を撫でる。知り合つて数日でここまで心を通わせる事ができた存在はフイリアだけだ。胸を張つて親友だと言える。フイリアがどう思つているかは知らないが。この子はおそらくどんな人にも優しい。ただ一人を想う事はないのだろう。それでもいいとリンは思う。この優しさと温かさを多くの人に伝えあげてほしいと思うからだ。そうすれば世界はもう少しだけ優しくなれる気がする。

「えへへー」

フイリアは嬉しそうに笑つてから体を離す。そして、元気よく歩き出す。リンはその背中を追いかよつと数歩歩いた所で止まる。フイリアが急に止まつたからだ。

「……アルバイト？」

フイリアが首を傾げる。見つめているのは壁に貼られた一枚のポスター。

「孤児院でのアルバイト募集。子供達を元気にさせられる方なら誰でも大丈夫！」……か

リンはポスターの文字を読む。後は右下に地図と、無邪気に笑う子供達の写真がついている。

「困つてゐるのかな？」

フイリアはポスターから目を離さない。確かに困つてはいるのだろうが、これは簡単な仕事ではないとリンは思う。大変は割りには時給がよくない仕事というのもあるものだ。まあ、時給はいいが下手をしたら死ぬかもしれない、外壁補修のアルバイトよりかはましだが。

「……でも、フイリアならやるよね」

リンは微笑んでから頷く。困つてゐる人を放つて置くことは絶対

にないと思う。

「困ってるなら……僕は全力で力を貸すよ」

フィリアはリンに笑顔を向ける。それから地図を凝視。もはや行く気満々である。リンは一度溜息をついてから微笑む。

「着替えたら……様子を見に行くよ」

リンも地図を確認してつぶやく。

「ありがとう、リン」

フィリアが満面の笑みを浮かべる。その笑顔を見てからリンは家へと急ぐ。その間に携帯電話を開いてメールを作成。送る相手は当然セツエイだ。彼の意見も聞いておきたい。セツエイはフィリアがないないと癒し愛好会は成り立たないと言っていた。だが、セツエイのように意見を述べてくれる存在は欠かせないとと思う。どこかでセツエイに頼ってしまう自分がいる。

「様子を見に行くか……」

リンは返信されたメールを読む。今日も誰かの心を癒す事ができればいい、そう思いながらリンは携帯を閉じた。

*

フィリアは地図の通りに道を進む。

「ここかな？」

フィリアが見上げた先には一階建ての木造アパートがあった。ドーム型都市で木造は珍しい。自然自体が珍しく材料が少ないからだ。この都市に住む人間は限られたスペースで生きるために無駄を嫌う。合理的であれば素直に従ってしまう傾向もある。一癖、二癖もあつた過去の人類と比べれば何の面白みもない人間が多い。こんなドームに囲まれて引き籠もっているからだと言う人間もいるが、ここでしか生活できないので、それは仕方のない事である。

フィリアは自らを鼓舞するために一度頷いて門を通り過ぎる。

「……どちら様？」

門を通り過ぎてすぐに声を掛けられた。フィリアは驚いて右を向く。そこには一人の青年が立っていた。サラサラの金髪に爽やかな笑顔を浮かべた細身の青年。年齢は20代中頃だろうか。

「僕はフィリア。ポスターを見て来たんだ」

「あ……アルバイトか。君は優しそうだから……大丈夫かな」

フィリアが笑顔で名乗るのを見て、青年はこの子なら子供達と会わせても安心だと思えた。正直どんな人が来るのか不安であったのだ。

「ぜひ手伝わせてください」

フィリアが胸の前で拳を握る。

「やる気満々だね。でも……あまり時給はよくないよ？」

青年が頭を搔く。子供四人の世話に、自らの生活もある。とてもではないが余裕はない。

「時給？ 僕は誰かの心を癒せればそれで満足だよ」

フィリアが笑顔でつぶやく。

青年は目を見開く。心を癒すために頑張る、こんな天使みたいな事を言う存在がこのドーム型都市にまだいたのが驚きだった。

「不思議な子だね。俺はフレイア……」この責任者だよ

フレイアと名乗った青年が手を差し出す。

「よろしく」

フィリアが天使の笑顔を浮かべて手を握る。フィリアの小さな手からは温かさが伝わる。ただ握手をしただけなのだが、心が軽くなつた気がする。本当に不思議な子だと思わずにはいられない。

「まずは紹介するよ」

フレイアがアパートに視線を向けた。

アパートに入ると木の独特の匂いがした。フィリアは自然に包まれたような錯覚を覚える。一度、深呼吸をして自然を満喫してから瞳を開ける。

「木造は初めて？」

フレイアが微笑んで問う。

「はい……。セツエイのアパートは鉄筋とコンクリートだから。前にいたのは……自然が全くない無機質な神殿だから」

フレイアが思い出しながらつぶやく。懐かしそうで、それでいて寂しそうな表情。

「神殿……？ 君は本当に面白いね」

フレイアがクスリと笑う。

「むー。本当だよ」

フレイアが両手を上げる。

「だって……このドームに神殿はないよ」

フレイアはおかしそうにつぶやく。

「空の上には神殿があるんだよ」

フレイアが天井を指差す。フレイアは堪え切れずに噴出す。フレイアは頬を膨らませて立腹の様子である。見ていて飽きない子ども、フレイアは感じる。まるで子供達を見ている時と同じ感覚である。

「フレイア……」の子だあれ？」

拙い声と共に5、6歳の少女と少年がフレイアの前に立つ。

「フレイアだよー」

フレイアは屈んで一人の頭を撫でる。

「お姉ちゃんも両親がいないの？」

「僕みたいに捨てられたの？」

少女と少年が問う。フレイアの表情が曇る。こんなにも無垢な少年達が口にしていい言葉ではない。だが、彼らに親を取り戻す事はできない。それならば出来る事をしてあげたい。

「うーん。両親はいないかな。セツエイならいるけど」
フレイアが微笑む。

「……同じだね」

少女が悲しそうに顔を落とす。そんな少女の頭をフレイアが優しく撫でる。

「今日からここでお手伝いをするんだ。よろしく
フィリアが少女の顔を覗き込む。

「うん」

少女がフィリアに抱きつくる。フィリアは少女を優しく受け止めた。
「……優しい子で良かった。俺は母親の代わりはできないから
フレイアは安堵の息を吐いた。

*

着替えを済ませたリンは地図通りの場所に足を運んだ。間違いはない。だがなかなか踏み込めない。この躊躇う性格をどうにかしたいとは思うが、なかなか治らない。

「……行かないのか？」

リンの背後から低い声が聞こえる。

「……ひつ……」

リンは驚いて飛び上がる。振り向くとセツエイがいた。

「……すまない。まさか驚くとは思わなかつた」

セツエイは若干、戸惑っている。常に無表情のセツエイだが、リンもようやく表情の変化が分かるようになつてきた。

「……びっくりしました。背後から話し掛けないで下さい。」
心の準備ができませんので」

リンは顔を真っ赤にしてつぶやく。

「俺と話すのは……心の準備がいるのか？」

セツエイが首を傾げる。

「……そ……そんな事はないですよ。あはは……」

リンが苦笑いを浮かべる。

「まあいい。行こう」

セツエイはつぶやいてアパートに向かっていく。全く躊躇しない。

「こういう所は見習いたいものである。

リンは頷いてからセツエイの背に隠れるようにして進んでいく。

セツエイがドアノブを掴むと何やら楽しそうな声が聞こえてきた。

「本当にシャイシャンは可愛いねー」

フィリアの楽しそうな声を聞いて、セツエイは安心してドアを開ける。開けた瞬間に少年、少女の視線がセツエイに注がれる。

「だ…誰？」

少女がつぶやいてフィリアに抱きつく。怯えて泣きそうなのは気のせいだろうか。

「お……おはよう。フィリアの友達だよ」

咄嗟にリンがセツエイの前に立つ。おそらくセツエイの無表情が恐いのだろう。

「あ……新しいお姉ちゃんだ！」

少女は花が咲いたような笑顔を浮かべる。リンは屈んで手を振る。

「……すまない。怯えさせてしまった」

セツエイがリンの背につぶやく。

「いえ……セツエイ先輩が優しい人だと分かれば大丈夫だと思いますよ」

リンが振り向いて微笑む。

「後ろのお兄さんがセツエイだよー」

フィリアがセツエイに微笑む。少年と少女が怯えながらセツエイを見つめる。

「恐がらせて……」「めんな

セツエイが屈んで二人を撫でる。一人はきょとんとした顔をしてからすぐに笑みを浮かべる。

「全然恐くない」

「うん。恐くない」

一人が同時につぶやく。セツエイは安堵の息を吐いた。もし、泣かれたらどうすればいいのか分からぬからである。こういう所はとことん不器用だとセツエイは思つ。

「集まってー！」

フィリアの声を聞いて残りの一人が姿を現す。だが、二人は積極

的に関わろうとしない。一人は手にした本を読み、もう一人は顔だけを覗かせてこちらを見つめていた。もしセツエイ達ができる事があるとするなら、この一人をこの輪に入れてあげる事くらいではなかろうか。

そして、もう一人フィリアの声を聞いて姿を現したのはフレイア。「三人も来てくれたのか……でも、こんなに払えるかな」フレイアが苦笑いを浮かべる。一人でも苦しいという状態である。三人はさすがに無理がある。

「お金が目的ではない……様子を見に来たんだ。邪魔なら帰ろう」セツエイが立ち上がり、フレイアを見つめた。リンも一度頷く。

「今日は本当に面白い人達が集まるね」

フレイアは微笑んだ。無償で子供の世話をしようと言つ一人に、不思議な事をつぶやく心優しい少女。このドーム型都市もまだ捨てられたものではないらしい。

「皆で遊ぼう」

フィリアが微笑んで提案。少年、少女が瞳を輝かせる。本を読んでいる少年は一度こちらに視線を向けるが無視をする。覗き見る少女もそのまま動かない。

「来ないのか……？」

セツエイが屈んで少女に問う。少女は一度肩を震わせてからゆつくりと近づいてくる。一人はとりあえず大丈夫そうだ。問題は本を読んでいる少年。この子を動かすのは難しいだろう。

「皆と遊ぼう?」

リンがセツエイの隣で屈み本を読む少年に声をかける。だが本に視線を向けたままである。一度もこちらに視線を向けない。むしろ馬鹿にしているように見える。

「むー」

フィリアが頬を膨らませる。素早く立ち上がり少年に近づく。だが、少年は視線すら向けない。フィリアは一度深呼吸をして平静を取り戻す。それからゆっくりと口を開いた。

「行こう」「う

フィリアがまずは優しく声を掛ける。セツエイとリンはフィリアの背中を見つめる。少年がどうこう反応をするのか固唾を呑んで見守る。

「邪魔しないで……どうせ行つてもつまんない」

少年はフィリアに背を向ける。どうやら関わる気はないらしい。これで大抵の人は諦めると少年は思っている。実際にそうである。しつこい大人は一度、三度声を掛けるが無視をすればそれ以上は関わってこない。

「そんな寂しい事を言つたら駄目だよ」

フィリアが少年の背に言葉を掛ける。

少年は一度振り向いた。他の人とは声の掛け方が全く違うため興味を持ったのだ。大抵の人は強引に連れて行こうとするだけだった。だがフィリアは優しく声を掛けるだけ。フィリアの優しい微笑を少年が見つめる。少年は慈愛に満ちた微笑から目を離す事ができなかつた。ただ自分を想い優しく見つめるフィリア。心が安らぐような不思議な笑み。

「行こう……」

フィリアが手を差し出す。少年は手を差し出しそうになつた。だが慌てて首を振り、背を向ける。

「嫌だ！」

少年は叫ぶ。その小さな肩は震えている。

「心を開いて……一人でいるのは悲しい事だよ」

フィリアが少年を優しく抱きしめる。少年は全身の力が抜けた。手に持つていた本が床に落ちるのも気にせずに、フィリアの右腕に触れる。

「どうして……？」

少年には理解できなかつた。アルバイトに来たのかと思えば、お金はさほど必要な様子ではない。ならばなぜこんなにも自分にこだわるのか。積極的に外に出ようとする者と遊べばフレイアは満足す

る。それでいいではないか。少年はフイリアが何を考えているのか知りたかった。

「僕は皆に笑顔になつて欲しいんだ。それだけ」

心地良い声が少年の耳に届く。

「……お姉ちゃんは天使みたいだね」

少年は微笑んでつぶやく。一度だけなら信じてみてもいいような気がする。

「僕は天使だよ」

フイリアが少年を解放してつぶやく。

少年は疑おうとは思わなかつた。奇跡の力が使えるとか、天界から来たとかそんな事は関係ないからだ。ただ誰にでも優しく話しかけるフイリアが少年の思う天使と重なつた。それだけの事である。

「これで全員……揃つたな」

一人を見守つていたセツエイが立ち上がる。

「出発！」

フイリアが拳を上げる。

「おー」

少年達が笑顔で倣う。三人は少年達に囲まれて外に飛び出すのであつた。

*

セツエイ達が向かつたのはドーム型都市6唯一の憩いの場である公園である。他に子供達を連れていけるような場所がないのは寂しい所ではある。

人工で作られたジョギングコースを進みながら目指すのは希望の庭。

「トメル君と、シャイヤちゃんは来た事ある？」

フイリアが手を繋いでいる二人に問う。この二人はフイリアが最初に出会つた二人で、すつかり懐いている。

「あるよ。ここまで一人で冒険したんだ」

トメルがその時を思い出したのか青い瞳を輝かせる。

「なかなか帰つて来なくてフレイアが迎えに行つたんだよ」

シャイイも思い出したのか可笑しそうに微笑む。

5、6歳という年齢は一人でどこまでも行ける。だが好奇心全開で進むのはいいが後先を考えないのが恐い所である。フィリアはセツエイから絶対に目を離すなと言われている。だからこの一人の小さな手をずっと握っているのだ。どこかに行くとしても付いていく事ができるように。

「そんなに警戒しないで」

リンが手を握っているのは先ほどからオドオドしている少女セリヤだ。リンの左手をしっかりと握り辺りをキヨロキヨロと見回している。あまり外に出た事がないのだろうか。世話をするのは大変そうだが、急に走り出したりしない分はいいのかもしれない。徐々に距離を縮めていけば問題ないだろう。

そして残った組み合わせはセツエイと本を読みながら歩いているクルトだ。

「……」

二人は無言だった。無理に距離を縮める事が良いとはセツエイは思わなかつた。クルトもとりあえずは自由にしてくれるセツエイの対応が気に入つたのか一定の距離を置いてついてくる。

「段差……あるぞ」

前を歩くセツエイが後ろからついてくるクルトにつぶやく。クルトは本から目を離して段差を見つめる。

「……意外だね」

クルトはセツエイの背を見つめてつぶやいた。もつと冷たい人かと思っていた。何だか自分が小さな人間に思えて仕方がない。クルトは溜息をついて本を閉じる。

「……まだ5歳だろう? そうやつて素直になつていた方がいいぞ。

俺はその事に最近気が付いた

セツエイが振り向いてつぶやく。無表情ではあるが若干微笑んでいるように見える不思議な表情だった。

「……それもフイリアのおかげ？」

クルトがフイリアの背を見てつぶやく。セツエイは無言で頷いた。

「……今からでも間に合つかな？」

クルトが顔を落とす。次の瞬間には大きな手がクルトの黒髪に触れる。

「ああ……今日がいい機会だ」

セツエイがクルトの髪を撫でながらつぶやく。クルトは湧き上がる感情を抑える事ができなかつた。こんな気持ちになつたのは初めてだ。クルトが顔を上げる。そこには少年の笑顔があつた。

「……俺も変わったな」

セツエイはクルトの笑顔を見てほつりとつぶやいた。

*

「……もう少し」

セリヤが手元にある真っ白な花を摘んでゆく。リンも両手で花を摘んでゆく。今までオドオドしていたセリヤは花を見た瞬間に微笑み自ら花を摘み始めた。おそらく花冠でも作るのだろう。

「お姉ちゃんはこの花を知ってる？」

セリヤが真っ白な花をリンに向ける。花が揺れた瞬間に綺麗な音が鳴つた。涼やかで落ち着いた音色。不思議な花だと思つ。まるで生きているようだ。

「ごめんね。花は詳しくないの。セリヤは知ってる？」

リンがセリヤに問う。

セリヤは質問されたのが嬉しいのかにこやかに笑う。どうやら説明したかったらしい。希望の庭に連れてきたのは正解だったらしい。「これはね……カナデの花って言うんだ。花言葉は浄化なんだよ。

この大陸の遙か彼方にある大陸から種が来たんだって

セリヤがカナデの花を見つめながら説明。音を奏でるからカナデの花らしい。この涼やかな音は確かに心を癒してくれる。

「セリヤは物知りだね」

リンがセリヤの頭を撫でる。

「……えへへ」

セリヤははにかんで笑う。この笑顔を同じ年の子に向けられればいいとリンは思う。おそらく出来るはずだ。今こうして笑っているのだから。

リンはとりあえず試してみることにした。辺りを見渡すとフィリア、トメル、シャイヤが花畠を楽しそうに駆け回っている。世話をするというよりも一緒に遊んでいるようにしか見えないフィリア。あそこまで無邪氣だと子供も気にせずに一緒に遊べるのだろう。この三人の中でも用があるのはシャイヤだ。

「シャイヤちやーーん！」

リンがシャイヤに向けて叫ぶ。セリヤは目を見開いて驚く。次の瞬間にリンの背に素早く隠れる。

「なに――！」

シャイヤが叫びながら元気よく走って来る。フィリアとトメルは気にした様子もなく花畠を駆け抜けている。

「花冠を作ろう」

リンがカナデの花を見せる。セリヤがリンの肩を強く掴む。震えているのが分かる。

「大丈夫。同じ年でしじう。仲良くできるよ」

リンが振り向いて微笑む。セリヤは怯えながらリンの隣に座る。ビクビクしながらシャイヤの表情を窺っている。

「いいよ！でも、上手くできるかな」

シャイヤが花畠に座り、リンから花を受け取る。

「大丈夫。いい先生がいるから」

リンがセリヤに微笑む。セリヤは顔を真っ赤にして首を激しく振

る。

「セリヤはこういうの得意だよね。裁縫も料理も出来るんだよ。私はセリヤみたいになりたいな」

シャイヤが笑う。

セリヤは驚いてリンを見つめる。リンが一つ頷く。きつかけがあればこの二人は仲良くなれる。そして、お互いを補い合えるいい友達になれると思う。

「……私はシャイヤみたいに明るくなりたい」

セリヤが小声でつぶやく。上田遣いに見つめた瞳がシャイヤの瞳と重なる。

「なら仲良くしないとね」

リンが一人の頭を撫でる。二人はリンを見つめて頷いた。

*

「よく飽きないな」

クルトは花畠を走り回るフイリアとトメルを見てつぶやく。その聲音はどこか呆れているようにも聞こえる。

「混ざつてみたらどうだ？」

セツエイがクルトを促す。だがクルトは立ち上がらない。

二人は現在希望の庭にある大木の木陰で休んでいる。幹に背を預けて動かないという姿は、まるで老人のようだ。

「想像できる？」

クルトがフイリアとトメルを見てつぶやく。セツエイは無言で首を振った。クルトがフイリアと一緒に笑顔で駆け回っている姿はさすがに想像できない。

「つまんない」

クルトは手に持っている本を開く。セツエイは一度溜息をついた。もう少しで心を開きそうなのだ。何かしてあげたい。

「……なら俺があの場で楽しそうに走っていたらどうだ？」

セツエイが本を読んでいるクルトの横顔を見つめる。クルトは本から目を離す。目を見開いてセツエイを見た。口をパクパクと開いて何か言いたげだ。

「……想像できないうだろ？」「

セツエイが微笑む。クールなイメージが強いセツエイ。そんな彼があの無邪気に走り回る一人に混ざるというのだ。想像できる訳がない。

「……やるの？ 本当に？ かなり……その……痛いよ」「

クルトが視線を外す。はつきりといつ少年である。まあ否定できないのが悔しい所ではあるのだが。

「……一人が馬鹿をやれば混ざれるだろ？」「

セツエイがつぶやいて立ち上がる。どうやら本気らしい。クルトは顔を落とす。なぜ彼らはこんなに必死なのだろう。放つておけばいいのに。クルトは仕方なく本を地面に置いて立ち上がる。

「……行くぞ」

セツエイが手を差し出す。クルトはその手を無視してフィリアとトメル目掛けて走り出す。

「……それでいい。子供はそれくらいでいいんだ」

セツエイはクルトの背中を優しく見つめた。

*

真っ白な花[冠]をゆつくりとシャイヤの頭にのせるセリヤ。シャイヤは頬を朱色に染めて微笑む。

「すごいね……セリヤちゃん。私は上手くできない」

シャイヤが肩を落とす。シャイヤの手にはカナデの花の他にも色々とりどりの花が握られている。

「もう少しだよ」

セリヤが胸の前で拳を握る。リンは優しく見つめる。子供は仲良くなるのが早いと思う。私達の年齢になつたら、こんなに早く馴染

む事はできない。

「わー、セツエイだ」

フィリアの楽しそうな声を聞いてリンが顔を向ける。セツエイとクルトが走っている。クルトは恥ずかしそうにしているが口元は笑っていた。あちらも上手くやつたようだ。

「お姉ちゃん……はい」

シャイヤがリンに淡いピンク、水色、そして白など色とりどり花で作られた花冠を手渡す。シャイヤの花冠と比べれば不恰好だが、しつかりとした形を成していた。

「くれるの？」

リンが花冠を見つめる。シャイヤが一つ頷く。リンは形を崩さないよう花冠を頭の上にのせた。

「……ローダンセにブルースター……」

セリヤが頬を朱色に染める。リンは小首を傾げる。何か意味がある花なのだろうか。花言葉などは全く知らないので、なぜセリヤが頬を朱色に染めているのか分からぬ。

「えへへ」

嬉しそうにシャイヤがリンを見つめる。じつやらシャイヤはこの花の花言葉を知っているらしい。

「えつと……教えてほしいかな」

リンは観念して一人を見つめる。一人は顔を見合させてから一つ頷く。

「永遠の愛に……幸福な愛……昔は結婚式に送るような花だったの」
セリヤがつぶやく。

「……」

リンは顔が真っ赤になつた。さすがにまだ早い。真っ赤になつたリンの顔を一人は微笑んで見つめる。そして、次にセツエイに視線を送る。こんな子供にも分かつてしまつなのだろうか。それか適当に当たりをつけているのだろうか。それは分からぬがこれだけ顔が赤くなつてしまえば肯定しているようなものだ。

「叶うといいね」

「ねー」

セリヤとシャイヤが微笑む。

「……もう。でも……まあいいか

リンは頭にある花冠に触れる。これには一人の想いが込められている。そして、ようやく馴染んだ一人。リンはセツエイにもフィリアにも頼らずに自分でこの一人の背中を押せた事が素直に嬉しかった。

*

花畠を四人が駆け抜ける。だが徐々にクルトが遅れしていく。普段から本ばかりを読んでいるクルトは同年齢の子供と比べて体力がない。

「…………はあ…………はあ…………」

クルトは苦しそうに顔を歪める。

「休憩か？」

セツエイが並走して声を掛ける。目の前を走る一人はまだはしゃぎ回っている。呆れるほど元気である。

「…………こんなに動いたのは久しぶり」

クルトはつぶやいて仰向けに倒れる。色とりどりの花が優しくクルトの体を受け止める。

「たまにはいいだろ？」「たまにはいいだろ？」

セツエイがゆっくりと隣に座る。クルトは視線をセツエイに向ける。セツエイは楽しそうに笑うフレイアを見て微笑んでいた。

「そうだね……本当に今まで何をやってたんだろう。親に捨てられてから……人と関わるのが面倒で……ずっと本ばかり読んでた。同じ境遇なのに笑っているトメルは理解できなかつた。優しいけれど関わろうとしないフレイアは信じられなかつた」

クルトが空を見上げる。遥か彼方にはドームの天井。

「……」

セツエイは無言で言葉を聞く。話したい事をただ聞くに留めたかった。器用な人間ならば相槌や、相手の言葉を繰り返すなど話しやすくする事もできただろう。でも、あえてしなかつた。セツエイはカウンセラーではない。知識だけで実践するよりも、ただクルトの想いに触れる事だけを考える。

「……このままではいけないと思つてた。でも、どうしていいのか分からなかつた」

クルトの視界が歪む。その瞬間に泣いているのだと分かつた。

「……泣いても……他人を拒絶してもどうにもならない。知つてゐよ……そんな事……でも……でも……」

クルトは今まで溜まっていたものが溢れて、止められなくなつてしまつたらしい。

「クルト……？」

異変に気づいたトメルとフィリアが駆け寄つてくる。

クルトは慌てて涙を拭いていく。だが溢れる涙を止められなかつた。

「見るな……見ないで……」

クルトは必死に涙を袖で拭う。

「恥ずかしがる事はないんだよ」

優しい声が耳に届く。クルトが気づいた時には上体を起こされ抱きしめられていた。

「……どうして……？」

クルトは問う。こんな泣いている姿など見られたくない。恥ずかしいと思う。

「誰でも悲しい時は……泣くから」

フィリアがクルトに優しく言葉をかける。クルトは全身が震えた。自分だけではない。皆がそうなれば何も恥ずかしくはない。

「クルトお……」

クルトの涙を見て、なぜか泣き出すトメル。

「なんで……お前が泣くんだよ。本当に……わかんない奴だな」
クルトは瞳に涙を溜めて微笑む。

「だつてえ……」

トメルは溢れる涙が止められないらしい。

「分からなければ……もつと話せばいいんだよ」

抱きしめているフィリアが囁く。単純な考え方だと思う。でも、間違つていない。話をなれば、触れなければ分からぬ。

「クルト……難しく考えるな」

セツエイがクルトの頭を撫でる。クルトは言葉の意味が分からない。ただセツエイの言葉を待つ。答えが知りたい。

「もつと簡単なんだ。クルトが泣けばトメルにも悲しいのだと伝わる。フィリアに触れれば……ちゃんと気持ちが伝わるだろ?」

セツエイが微笑んでつぶやく。

クルトは自らを抱きしめているフィリアを見つめる。フィリアからは温かさを感じる。優しさが心を温めてくれる。クルトはフィリアの言葉ではなく、この温かさによって癒されている。特別な言葉なんていらないのだ。

「そつか……」

クルトは一度涙を拭つてトメルに微笑む。

「笑つた!」

今まで泣いていたのが嘘のようにトメルが笑う。

「簡単だらう?」

セツエイがクルトに微笑む。クルトは一度頷いた。

「もう……大丈夫。セツエイは魔法使いみたいだね」

クルトがフィリアから一步離れてつぶやく。

「どうだかな……俺はフィリアの方が魔法使いに見える

セツエイが立ち上がりつてフィリアの頭を撫でる。

「うん?」

フィリアは小首を傾げる。だが、笑顔に戻ったクルトを見つめて元気に微笑んだ。

*

時刻は午後5時。フレイアは門の前で腕時計を見つめる。そろそろ帰ってきてもいい頃だ。ふと視線を左に向けると待ち人がいた。楽しそうに手を握って話しているセリヤとシャイヤ。そして、トメルを注意しながら歩いているクルト。その姿を後ろから満足そうに眺めている三人。

「……すごいな」

フレイアが独語して微笑む。出かけた時とはまるで違う。歳相応の姿をした彼らがいる。いつたい彼らは何をやつたのか。おそらく特別な事はしていないのだろう。ただ真摯に向き合つただけなのかかもしれない。その真摯な思いが彼らの緊張を解したのかもしねりない。

「ありがと」

フレイアは不思議な三人を見つめてつぶやいた。

天使と癒しの羽 4（後書き）

お読みいただきありがとうございます。感想等ありましたらお願い
致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3846x/>

天使と癒しの羽

2011年10月23日19時04分発行